

授業素材としての「資料小展示」紹介（2）

山本明史

一 資料小展示について

山口県文書館では、普及・教育活動業務の一つとして、閲覧室入口の展示ケースを利用した月替わりの小さな展示を昭和四十九年度から継続して行っている。館員が各自の得意分野を活かし、中世から現代までの所蔵資料を様々な切り口から紹介しており、その数は四〇〇を超えている。

筆者は先に、この小展示のデータの蓄積が授業作りに有効であることを指摘し、過去のテーマを一覧表にまとめて紹介した。⁽¹⁾ 本稿はその続編で、平成二十年度第八回以降およそ十年間の展示を紹介する。

二 Webサイトによる資料小展示紹介

当館ではWebサイトを用いた情報発信に力を入れている。資料小展示についても、Webサイトの全面改修を行った平成二十三年以降は展示紹介文を、平成二十六年以降は展示解説シート（PDFデータ）を見ることができる。⁽²⁾

展示紹介文にはメインとなる資料画像とともに展示の趣旨が簡潔に記載されており、展示概要をつかむのに便利である。また、展示解説シートは実際に配布したもので、展示内容について細かな情報を得ることができる。後掲の一覧表はおもにこれらの内容をまとめたものである。

三 授業での活用について

このたび、学習指導要領がおよそ十年ぶりに改訂された。新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」がキーワードの一つとなっているが、文書館の資料と向き合い、様々に検討し合う活動を通して、そうした学びもできるのではないだろうか。その際、小展示のテーマ群は有効な材料になると考える。

また、高等学校地理歴史科の新設科目である「歴史総合」ならびに「日本史探究」の「内容の取り扱い」において、「公文書館」が博物館等とともに調査・見学の機関の一つに名を連ねた。さらに、そうした学習を行う際に、歴史に関わる諸資料を整理・保存することの意味や意義に気付かせることも明記された。⁽³⁾

これらは、アーカイブズ機関にとって歓迎される動きと捉えられるが、同時に学校教育現場からの需要に応えるための環境整備がアーカイブズ側に求められていると言える。

四 資料小展示テーマ一覧

後掲の表は、過去の展示のテーマをまとめたものである。

展示年度、標題、展示紹介文、展示資料名または展示項目、資料請求番号を示した。授業を進める上での便宜を考え、テーマを中世、近世、幕末維新、近代、現代の順に分類し、展示年月の古いものから並べた。なお、当館開館五十周年の平成二十一年度には、「シリーズアーカイブズを守る」のテーマのもとに年間を通じた展示を行い、記録・資料の保存の重要性を訴えた。平成三十年から平成三十一年三月までは、「文書館資料にみる幕末・明治の人・物・文化」のテーマで明治百五十年を意識した展示を行った。これらについては末尾に別の項目を立てて紹介している。

註

- (1) 拙稿「授業素材としての「月間小展示」紹介」、『山口県文書館研究紀要』第三六号、平成二十一年。
- (2) 資料小展示の情報は当館の次のサイトに掲載をしてゐる。
<http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/index/page/id/814>
- (3) 「高等学校学習指導要領」平成三十年三月告示。

表資料小展示一覧

- ・本表には、平成20年度第8回から令和元年度第10回までの資料小展示の情報を収録した。
- ・展示年度（回）、標題、展示紹介文、展示資料名（展示項目）、資料請求番号を示した。資料名と請求番号はエッチク体で示した。
- ・展示紹介文はウエブサイトに掲載されたものから適宜引用し、展示内容を簡単に紹介した。
- ・ウエブ欄は、◎…展示紹介ページ・展示解説シートともにあり、△…展示紹介ページのみあり、×…ウエブサイト上での情報なし、とした。
- ・資料小展示の情報は、当館の次のサイトに開催年度ごとに掲載している（<http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/index/page/id/814>）。
- ・テーマの配列については、テーマを中世、近世、幕末維新、近代、現代の順に便宜上分類し、展示年月の古いものから並べた。
- ・H21年度および平成30年度に行われたテーマ展については末尾にまとめた。

【中世】

標 題	展示紹介文、展示資料名（展示項目）、請求番号	ち
鎌倉時代の塩浜絵図 —長門国正吉郷入江塩 浜絵図— (H20年度⑥)	古式入浜式塩田を描いた絵図としては最も古いとされ、全国的にも貴重なものです。材質は楮紙で、大きさは、縦29.1cm×横36.0cm。絵図の南端には波打ち際が線描され、中央には朱色で「入江干潟」の範囲が囲まれています。その内側の五カ所の塚が「塩塚」で、満潮時に「大道口」から海水を導入して干し上げ、塩分が濃縮されてくっついた砂を積み上げたものです。また、干潟の周囲に「本境」、その外側に「田」の文字が記され、海水が水田に入るのを防ぐための土手が干潟の周囲に築かれていたことがわかります。 * ①長門国正吉郷入江塩浜絵図	×
足利將軍の出した文 書②・③ (H21年度⑦) (H22年度⑩)	今回の展示では、当館の所蔵文書の中から、足利將軍の出した文書を紹介します。さすがに室町幕府の主(あるじ)として武家(ある意味では公家も含む)社会の頂点に君臨しただけあって、彼らが出した文書には風格が感じられました。例えば、江戸時代の村役人が出したものとは趣が異なるのです。くずし字は難しくてチョットという人でも、筆跡、墨の濃淡、字配り、使われている紙の種類、花押(かお)う(サイン)など、「モノ」としての文書の世界を自分なりに味わってみてください。 * ①足利義教御判御教書(石田毛利家文書・複写資料275(1))、②足利義教御内書(三浦家文書・複写資料182)、③足利義隆御内書(右田毛利家文書・複写資料275(1)) * ①足利義隆御内書(村上家文書・複写資料141)、②足利義昭御内書(山内家文書・複写資料145)	×
長門豊田氏 (H23年度⑫)	豊田氏は、大内氏や厚東氏と共に「防長の三大名族」と称された一族です。平安時代に豊田郡司としてその姿を現し、南北朝時代には防長両国を統一した大内氏の傘下に入り、その後、毛利氏に仕えて江戸時代には武家士となりました。そのため、豊田氏の実像は、いまだによくわかっていないのです。今回の展示では、この豊田氏に関する数少ない史料を紹介します。 * ①太政官符案(217/700)、②豊田種親番状写(関閑録差出原本179)、③小野資村軍忠状写(関閑録差出原本179)、④關太暦 文和2年正月10日条(217/700)、⑤興隆寺一切経動進帳(複写資料177)、⑥大乗院寺社雑事記 文明2年5月22日条(217/700)、⑦風土注進案 前大津幸判 殿敷村(291/700) ⑧譜録 豊田権右衛門連護(複写資料258)、⑨長門国田旗詠(近藤文庫59)、⑩豊田氏関係史料(近藤文庫329)、⑪二神家文書写(風土編纂1049)	△

二ノ丸様と杉次郎 (1) (B24年度②)	二ノ丸様は、毛利氏の譜代家臣である児玉元良の嫡子です。美人の誉れが高く、当初、周防野上(のがみ)庄の領主であった杉小次郎に嫁ぎますが、のち毛利陣元の側室となり、萩藩初代藩主の秀統(ひでなり)と徳山藩初代藩主の就隆(なりたか)児孫を生みました。しかし、側室になった経緯は、誘拐一夫・小次郎の謀殺という文脈で語られることが多く、また正室の嫉妬にも悩まされたといわれ、若くして亡くなりました。こういったことから、二ノ丸様には、「薄幸の美女」というイメージがきまっています。「姫山伝説」、「杉小次郎の遺書」、「秀統の出生地」等々、彼女に関わる様々な伝説や伝承も生まれました。 今回の展示では、この二ノ丸様と杉小次郎に関する史料を紹介いたします。 *①諸藩 男五三郎右衛門広長(複写資料148)、②二ノ丸様 全(毛利家文庫3本続130)、③杉山山左守孝久之次策 相島作右衛門御幸公並願書(複写資料516)、④二ノ丸様と杉小次郎一件(毛利家文庫16巻書44)、⑤毛利宗頼(複写書状(関閣録 男五三郎右衛門)291/Y000(関閣録)) ⑥寺社由来 周慶寺(291/Y000)、⑦寺社由来 深富寺(291/Y000)、⑧周慶様御事 大照院様御誕生之地(毛利家文庫23本続190)、⑨風上道楽 如意寺村 下ノ山野村(291/Y000)
二ノ丸様と杉小次郎 (2) (B24年度③)	二ノ丸様の最初の夫・杉小次郎は、実名を元宣といい、周防国野上庄(現在の周南市)の領主であった杉氏の嫡男です。杉氏は、もともと室町時代に西日本最大の大名家であった大内氏の重臣で、一族で栄えました。小次郎の家は、代々小次郎・次郎左衛門尉を仮名・官途として、名前の一字に「相」と「直」字を交互に名乗るのが特徴です。15世紀末から3代にわたって大内氏の安芸国支配の拠点であった東西菜(現在の東広島市)の代官を務めるなど、毛利氏とも因縁浅からぬ家でした。 今回の展示では、この杉小次郎及び杉氏に関する史料を紹介いたします。写真1「杉弘相書状」(浦家文書)です。 *①寺社由来 徳山領 興元寺(図書291/Y000)、②杉元宣(書状(関閣録 100仲子平兵衛)(図書288)、③杉元宣相判同行人泰書(諸臣157)(複写資料536)、④大乗院寺社雑事記(山口県史中世1)(図書217/Y000)、⑤杉弘相書状(複写資料105)、⑥毛利弘元書状家(図書210/088)、⑦杉小二郎屋敷之事其外意書(多賀社文庫348)、⑧寺社証文 興元寺(図書291/Y000)
大友宗麟の発給文書 (B25年度⑤)	大友宗麟(ぞうりん)は、豊後府内(現在の大分市)を本拠とする戦国大名・大友氏の当主です。宗麟は、実名を義績(よししげ)といい、出家後は宗麟→三非斎→内斎→附蘭→宗麟と名を改めます。全盛期には北部九州6か国を支配する一方で、ホルトカトル船などと南蛮貿易を行います。また、サビエルを招いてキリスト教の布教を保護し、自らもキリシタンとなって、フランシスコとも称するなど、「キリシタン大名」として著名な人物です。後半生は、臼杵(現在の北分県臼杵市)にうつってそこを居城としました。 今回の展示では、この大友宗麟の発給した文書を紹介します。本文は、右筆(ゆうひつ)とよばれる字のうまい書記官が書いていますが、サイン(花押)は本人の手になるものです。また大友氏は、豊後(ひい)とよばれる当時の最高級紙をよく用いています。内容はこちらんのこと、使われている紙の種類や墨の痕などにも注目して味わってください。 *①大友宗麟(書状(上家文書(複写資料41)、②大友宗麟・同義郎(書状(上家文書(複写資料141)、③大友府蘭(宗麟)書状(池田耕夫所蔵文書(複写資料588)
厚東氏と同時代の武将たち (B25年度⑩)	厚東氏は、大内氏と並び中世の防長両国(現山口県)を代表する武士です。14世紀の南北朝時代に長門国守護に任じられるなど最盛期を迎えますが、大内氏との勢力争いに敗れ、没落します。そのために残された関係史料も少なく、厚東氏の研究は大内氏と比べると立ち遅れています。しかし、最近厚東氏に関する史料集が刊行され、展示会も開催されるなど、注目を集めつつあります。 今回の展示では、その厚東氏が活躍した南北朝時代の「厚東氏」とも関わりのある5人の武将(足利尊氏、足利直義、足利直冬、大内弘世、平子親重)の文書を紹介します。本文は、右筆(書記官)が書いていますが、サイン(花押)は本人の手になるものです。内容はこちらんのこと、筆跡、墨の濃淡、字配りや使われている紙などにも注目して、650年の時を越えてきた文書の迫力を味わってください。 *①足利尊氏(袖判下文(三浦家文書(複写資料184)、②足利直義(袖判下文(山内清義家文書(複写資料143)、③足利直冬(書下(興隆寺文書(複写資料181)、④大内弘世(書下(興隆寺文書(複写資料181)、⑤平子親重(忠状(三浦家文書(複写資料184)

館蔵資料にみる黒田官兵衛 (B26年度⑤)	戦国時代、大名は有能な人材を側近くに置き、彼らの政策を取り入れて、内政・外交など様々な政策を実行していききました。こうした人物の中で特に優れた者は「重臣」などと呼ばれ、今話題の黒田官兵衛もその一人に挙げられます。 今回の資料展示では、当館所蔵資料の中から、その黒田官兵衛に「プロローグ」してみます。 ※①黒田孝高書状(天正14年＝1586)11月10日(宗右屋家文書41)、②小早川隆景書状(天正14年5月2日「毛利家文庫」運用物中105-1)、③吉川元春書状(天正14年9月23日(阿川「毛利家文書」) ◎
新収・益田高友家文書の紹介 (B26年度⑥)	本年、山口市在住の御子孫より「益田高友家文書」が文書館に寄託されました。 益田高友家は藤原姓。中世西石見最大の国人領主であった益田家の分家で、応仁・文明の乱で活躍した益田貞兼の四男兼勝に始まります。戦国期は益田家の親族として活動し、大内氏やその有力家臣と直接交渉を持っていました。近世に入り、周防国吉敷郡岡田を本拠とした岡田益田家の「家老」となりました。 本展示では、この「益田高友家文書」の一部を紹介します。 ①大内義長書状(益田高友(6の1))、②尼子晴久書状(同16の22)、③益田宗兼感状(同210の5)、④御感状其外万御判物之写(同3)、⑤御神本并益田家系図(同5)、⑥御神本氏并益田氏系之図(同6)、⑦隆政(同14)、⑧「新隆」柳生家当流秘伝書(同15) ◎
信長の娘と伝えられた女性 (B27年度⑦)	戦国時代に毛利家と婚姻関係を結んで同盟関係を築き、江戸時代は萩藩一門重鎮となった宍戸家、宍戸元就の最初の妻であり、元就との間に一女(右田元傳の妻)を儲けた女性には、織田信長の娘と伝えられています。実は、彼女は様々な顔を持っており、信長の娘云々という説はその一部にすぎません。 本展示では、当館所蔵資料の中からこの女性に関する史料を紹介します。 ※①巨摩系図(毛利家文庫「複写資料439」)、②風土注進案三丘村之内小松原村図(書291/700)、③司前伝 付宍戸元就室家之并(毛利家文庫「複写資料439」)、④豊臣秀吉朱印状(複写資料275(3))、⑤ 豊臣秀吉朱印状(複写資料275(3))、⑥藩の墓(図書210/400) ◎
理を曲ぐる法はあれど法を曲ぐる理あるべからず -『廻船式目』- (B28年度⑧)	「理をまぐる法はあれども、法をまぐる理あるべからず」、これは16世紀ごろに成文化したと考えられる「廻船式目」(廻船法条物・廻船大法)の一節です。その文言の勢いにおされてか、毛利家はこの法をそっくりそのまま自らの法令に取りこんでいます。廻船の契約規定や損害補償条項などを含むこの法は、全国で80以上のものが知られており、その文末には、ほぼ例外なく貞応2年(1223)の奥書をもちます。もとよりこの年号を信じることはできませんが、江戸時代には全国の主な廻船・海運業者は皆この法を大切に秘蔵してきたといえます。今回の展示では、この「廻船式目」を紹介します。 ※①「諸御書付二十八冊」(毛利家文庫40法4135(29の17))、②「船法度三拾巻案」(旧蒲別置11豊浦藩日記64)、③「船法度 全」(佐川家文書平生町1084)、④「船法議」(同626-3) ◎

重要文化財 村上家文書 (B29年度③)	平成27年(2016)、当館に寄託中の「能島(のしま)村上家文書」のうち、慶長4年(1599)までの文書199通が、「厩所旗」とともに国の重要文化財に指定されました。能島村上氏は、戦国期の瀬戸内の海上交通を支配した、いわゆる「村上水軍」のうちの、最も勢力があった家です。そのため、能島村上家に伝わった文書群は、海上交通の要衝である瀬戸内海において、水軍を編成した戦国期武家の具体的な活動と変遷を知ると、たいへん高い歴史的な価値を持っています。本展示では、第12回中国四国地区アーカイブスウィークの歴史探究講座において、「海の大名 能島村上氏」をとりあげるのにあわせ、この「重要文化財 村上家文書」の一部を特別に紹介します。 * ①羽柴秀吉書状(図書218/83)、②堀江正統・村方連書状(図書218/83)、③繪田信長印状(図書218/83)、④毛利元就・小早川隆景・毛利輝元連署起請文(図書218/83)、⑤小早川隆景起請文(図書218/83)、※図書名:『治郷士史 村上家・共島家文書 大山原神社・国分寺文書 能寂寺・仙遊寺文書 資料編 古代・中世』、⑥通所旗(村上家文書4)、⑦瀬田信長の署名と朱印(村上家文書5(13の8))	◎
決戦！船岡山 -大内義興 天下分け目の戦い- (B元年度⑤)	永正8年(1511)8月24日、船岡山(京都市北区)において、大内勢を主力とする将軍足利義隆側の軍勢と前将軍方の軍勢が戦います。わずか1日で決着がついたこの戦いは、いったん丹波国に逃れた義隆と義隆を擁する大内義興が再び京都を奪還できるかどうかという、彼らの今後の運命を大きく左右する天下分け目の戦いでした。この戦いの勝利によって、義隆・義興は前将軍方の勢力を京都から追い払い、政権を維持することができたのです。本展示では、当館所蔵資料の中から船岡山合戦に関連する資料を紹介します。 * ①足利義隆御印書(右田毛利家文書/複写資料275(1))、②大内義興前状(右田毛利家文書/複写資料275(1))、③大内義興密状(浦家文書/複写資料105)、④杉興宣副状(浦家文書/複写資料105)、⑤大内義興密状(御野家文書/複写資料444)、⑥大内氏家臣連署家書(近藤清石文庫/複写資料273)	◎

【近世】

標 題	展示紹介文、展示資料名(展示項目)、請求番号	コ ミ ュ ニ ティ
萩藩一門穴戸家の花押 -末兼家文書の紹介- (B22年度①)	当館所蔵の末兼家文書は、江戸時代、穴戸家の家老を務めた末兼家に伝来した文書群です。末兼家文書には、江戸時代の穴戸家当主(4代就附から11代代親基まで)が末兼家へ宛てた書状がたくさん残っています。 現在知られている限り、江戸時代の穴戸家の書状がこれだけまとまって残るのは珍しい例です。書状の多くには当主の花押が描えられており、これによって、いままで明らかにならなかった江戸時代の穴戸家歴代当主の花押を知ることができます。 * ①穴戸広周書状 末兼と兵衛宛(末兼家文書140)、②穴戸就附書状 末兼と三兵衛宛(同100)、③穴戸隆道(就延)書状 末兼と兵衛宛(同8)、④穴戸広宗(広隆)書状 末兼十左衛門宛(同11)、⑤穴戸広周書状 末兼と左衛門宛(同41)	×
スポーツ時代中展Ⅱ 免許皆伝の書 (B22年度②)	第66回国民体育大会「おいでませ！山口国体」、第11回全国障害者スポーツ大会「おいでませ！山口大会」が、いよいよ来年、開催されます。今回の展示では、山口県文書館所蔵のスポーツに関する資料の内、「免許皆伝」に関わる資料を取り上げてみます。 江戸時代、弓術・馬術・剣術・剣術・柔術などの武道が盛んで、数多くの流派が存在しました。それぞれの流派で、その術は秘伝のものとして厳しい修行を経て伝承されてきました。スポーツの世界では日々の練習が何より大切ですが、武道の修行においても同様で、「免許皆伝」は、厳しい鍛錬の最高の成果と言えるでしょう。 * ①起請文前書之事-新陰流兵法相伝付而法度條(御持家文書36)、②新陰柳生家当流免許皆伝書(冷泉家文書196)	×

徳山毛利譜縁を作る (2) (B22年度③)	徳山藩では、藩士に対して4回にわたり、各家の系図やその家族、当主の職歴などを書き出させた「譜縁」の作成を命じました。当館が所蔵する徳山毛利家文庫に含まれる「譜縁」がその成果です。 しかし、「譜縁」の作成にあたっては、決められた様式に基づいた記述や、短期間の作成が求められ、何よりも、自家の歴史の調査という多大な労力を費やす作業が、日常の勤めに加わったために、藩士たちにとって大きな負担となりました。また、江戸や大坂へ向き国元を離れたい者や、病氣を煩った者、日常の勤めに忙しなくなるなど、調査そのものが困難だったり、不可能だったりする者も少なくありませんでした。彼らのように、期日までに「譜縁」の提出がゆわかない者は、藩へ提出期限の延長を事前に願い出なければなりません。今回は、「譜縁」作成に苦渋した藩士たちの姿が偲ばれる資料を展示します。 ※①家譜差出方新叙(徳山毛利家文庫 土民方15)、②譜縁願事録初編(同 願事録102)、③宗古屋談之進家譜縁四編草案(徳山宗古屋家文書)、④御書出控(徳山毛利家文庫 御書出控43)	×
開国 (1) -ロシアの接近- (B22年度④)	坂本龍馬が「ニッポンの夜明けせよ」と叫んだというのはどうもフィクションのようですが、オランダ以外の欧米諸国と久しく交流を持たなかった日本が、いやおうなく世界に開かれた幕末の時期は、その意味では「夜明け」と呼んでいいかもしれません。徳山毛利家文庫に含まれているものを中心に、ロシアの接近、四か国との和親条約、五か国との修好通商条約を順次ご紹介・展示していきます。 ※①ロシア船図(徳山毛利家文庫 条約26「魯西亜志」附圖)、②魯俄(同 条約30「文化元甲子魯九月縁江戸ロシア書翰問簡陀基爾譯仕使横文字和解并フロシヤ國圖之地名」、③藩民御覽之記(同 条約24「泰西諸説」、④魯西亜志(同 条約28)、⑤ロシア船之図(同 条約28「魯西亜志」附圖)	×
萩藩密用方と中山又八郎 (1) -毛利家文庫の源流を創り出す- (B23年度③)	密用方は、安永3年(1774)10月に新設され、様々な修史事業、記録編纂事業、調査事業を担当した役所です。幕末まで活動を続けた密用方は、次第に藩庁における「情報」の保管庫としての性格を帯びていきました。 密用方が収集、作成した文書記録は、現在、毛利家文庫の中で大きなウエイトを占めています。密用方は、毛利家文庫の源流の一つを創り出したといえるのです。 密用方の初代頭人(密用方トッパの役人)となったのが萩藩士中山又八郎です。今回は、又八郎の仕事の一部を紹介いたします。 ※①密局日乗 安永3年(1774)10月28日萩毛利家文庫(9日記18)、②秘局館員録(同10番役30)、③「毛利庄」の作成〜毛利家故地を調査〜(同30地誌9)、④「御教成」編纂作業〜祖先の言葉を集める〜(同30公統123)、⑤「雲去日蹟記」〜安芸・出雲の日蹟を訪ねる〜(同30地誌12)	△
父親の身代わりと なった息子の物語 (B23年度⑤)	18世紀末に萩藩士能美吉右衛門以成によってまとめられた『蔵薩録』の中に、次のような話が収められています。周防大島のとある百姓が、罪を犯して牢屋に入れられることになりました。その十八歳になる息子が、自分を父親の代わりに牢屋へ入れるよう藩に願い出ました。藩は願いが通りでないかと思いますが、息子は「死罪は寛済の上」（死罪寛済仕候）といって引き下がりません。結局、藩は父親との入れ替わりを認めることになりましたが、今度はそれを聞いた父親が、息子を想って牢屋から出ようとしません。結局、父親を無理矢理牢屋から出し、七日後に息子が牢屋から出して、周防大島に帰らせたとのことです。今回は『蔵薩録』を中心に、明治期になって編纂された人物伝も併せて展示し、この物語について解説します。 ※①蔵薩録(毛利家文庫16蔵番87)、②防人人物志、③近藤清右輔「山口県風土誌」(県庁蔵前A総務1923)	△

毛利家の家紋 -家の紋・旗指物・合印等之図- (B24年度①)	今回は、「家之紋・旗指物・合印等之図」（毛利家文庫15文武）を展示します。この文書は、約200年前の文化元年(1805)、萩藩の密用方が作成したものです。萩毛利家をはじめ、各支藩の毛利家、吉川家、および萩藩の一門人家が使用していた家紋、および旗指物、馬旗、吹流(いずれも重中髷職)、合印等が彩色で描かれています。 作成のきっかけは、前年8月、幕府が萩藩へ提出した指示だったことでした。当時江戸にいた大名たちは、「藩府の御用絵師・狩野養川院推信(木挽町狩野派)が坂下の陣の絵図を作成する資料にするためにいい」と嘆息していたようです。 「家之紋・旗指物・合印等之図」は、歴史資料としての価値の高さはもちろん、家紋や旗の色や形など、見て楽しい資料です。 *①御敵・御旗指物・合印内附出一件(毛利家文庫15文武36)、②家之紋・旗指物・合印等之図(同15文武36～37)	▽
萩往還と道松 (B24年度③)	江戸時代、軍用と旅人の道標とするため、街道の両側に数多くの道松が植えられていました。例えば、萩往還の周防長門国境・板壺峠～山口・長野村だけでも、4,718本も植えられていたことが記録に見えます。 現在、道松の大半は失われていますが、一筋の街道に沿って延々と道松が立ち並ぶ景観は、とても印象的なものであったにちがいありません。 *①東門国阿武郡萩より周防国山陽道防宮市宿迄往還図、②山口幸判道松絵図、③三田尻幸判道松絵図、④諸御書付二十八冊(道橋井道松修補の事)、⑤御書付其外後援要集三(道松種継の事)	▽
古文書にみる祭り・行事 -山崎八幡宮の本山神事- (B24年度④)	今回は、周南市富田の山崎八幡宮で行われる本山神事に関する史料を紹介します。本山神事の概観は、本山・嶺山・遼山という三台の山車にあります。この三台の山車はいずれも鉦を使わず、枹(ほぞ)と枹穴を組み合わせ、事前に採取したカヌラで結わえるなどして組み立てられます。山車は坂から落とされた後、解体され、その部材は翌年まで保存されます。そして傷んだ部材のみを入れ替えて、また組み立てられます。 今回の展示では、この三台の山車に関する史料などを展示します。 *①願事録(徳山毛利家文庫 願事録11)、②御領内諸神社祭事記下書(同 寺社・町方48)、③県社以下神社(県庁職前B668)、④防長寺社由来第6巻	▽
「防長風土注進案」 にみる村人たちの「つとめ」と「贈答」 (B24年度⑥)	人々は、年間を通じて実に多くの場面で、親戚や同じ村の人たちと、形式張った挨拶をかわし、また金品のやりとりや贈り物をし、互いの関係を深めました。それらのほとんどは「お互いさま」のことがらで、現代では「虚礼」として縮小されつつありますが、かつては、それ(つとめ)をあることは、社会生活を送るうえで、許されないことでした。「はじめからゼロである」ということと、「互いの贈答によってプラスマイナスがゼロになる」ということは、社会生活における関係性において、まったく違う、むしろ逆の意味をもっているのです。今回の展示では、江戸時代後期の村人たちの暮らしの中の「つとめ」と「贈答」のありようを、「防長風土注進案」によってみてみましょう。 *①年頭のとめあい(防長風土注進案 吉田幸判山中村)、②五節句・盆のつとめあい(同 吉田幸判吉田村)、③田植え後の挨拶(同 奥阿武幸判福田村)、④秋祭りでのつとめあい(同 奥阿武幸判木与村)、⑤歳暮・役末のつとめあい(同 大島幸判森村)、⑥寺子屋の師匠へのつとめ(同 小瀬幸判喫波村)	▽
萩藩密用方と藩士長 谷川基平 -18世紀末、変わりゆく密用方- (B24年度⑨)	萩藩密用方は、安永3年(1774)、7代藩主毛利重就の時代に新設され、様々な調査、修史、記録編纂事業を担当した役所です。設置当初の密用方は、主に藩主が要望する事業を担当していました。しかし、重就死後(寛政2年(1790))は、藩が直面する重要課題(例えば海防・軍中問題等)に対応した事業を担う役所へと性格を変えていきます。 そのような時期、中心となって密用方業務を行った一人が藩士長谷川基平でした。今回は長谷川の仕事を紹介します。 *①密高日集天明8年(1788)12月23日(萩毛利家文庫19日記18)、②於録番相尊一件(同12社寺33)、③彦旗考(同15文武61)、④密高日集 寛政4年(1792)2月2日(同19日記18)	▽

例れ逝く者達 -廻国修行者の行き倒れ- (B24年度⑩)	当館が所蔵する「諸事小控」(毛利家文庫31小々控、443冊)という文書の中に、六十六部という廻国修行者の県内における死亡記事が多数残されています。今回はこれらの史料の中から、小郡津市で宝永4年(1707)に行き倒れた土屋利兵衛という六十六部に関する史料を紹介いたします。 *①諸事小々之控・毛利家文庫31小々控(4の30)、②御国廻御行程記(絵図でみる防長の町と村)③、④風土注進案(県庁伝来旧藩記録 風土注進案297)
牛を殺す怪獣 シイ (B24年度⑨)	牛は農民にとって大切な労働力であり、家族のように愛しました。それは、多く牛小屋(敷屋)が母屋に接続してつくられていることからわかります。牛の安全は人々の重大な関心事でした。今回の小展示では、その大切な牛を殺すという伝えをもった怪獣「シイ」について、いくつかの資料を紹介します。 「シイ」は誰に似た獣といひ、貝原益軒の「大和本草」などにも記述されていますが、具体的にどのような動物かは定かでありませんし、江戸時代後半にはなつかば伝説化し妖怪化しています。また益には「シイ」を防ぐために「牛糞」とよばれる火祭りを行った村もあり、伝説の伝播と成長という視点からも興味深いものがあります。 *①防長政事年表(県庁伝来旧藩記録1082)②延宝具聞録(県庁蔵所史料104)③吉川左衛門内産物並方言(毛利家文庫34産業⑨)④防長風土注進案(深河村刊本19巻P219)、⑤防長風土注進案(徳山村刊本19巻P386-387)、⑥和漢三才図会(山口県立図書館蔵)
芸州吉田行程記 (B25年度①)	「芸州吉田行程記」は、山陽道の小瀬川国境を築いて広島城下へ向かい、同城下で分岐して北上したのち、毛利元就墓所・郡山城跡のある安芸国高田郡吉田庄に至る道筋を描いた街道絵図です。 作者は、萩藩絵図方付置き(元)の絵師・有馬重樹太で、作製時期は、宝暦12年(1762)9月15日から24日の間です。同年6月28日から8月10日まで、豊惣太が、藩主御密用の「元郭公御願所図」・「郡山絵図」作製のため、安芸国吉田へ出張した際に、用務の合同を使って下図を作り、帰国後に仕上げたものです。作製目的は、藩命ではなく、国元幕府役高須平七の内見に供するためでした。 *①「芸州吉田行程記」(備後彦市邸収蔵史料42)
山口町人安部氏の奥州旅日記 -京・江戸に遊び、富士山に登る、東北で見たものは- (B25年度②)	今から約210年前の文化2年(1805)、山口町の町人安部四郎右衛門が、東北地方を訪れる大旅行に出かけました。彼が40代半ばの頃です。6月15日に山口を発し、11月19日に帰国するという長い旅でした。立ち寄った国は、遠く陸奥国をはじめ、20ヶ国以上に及んでいます。大坂、京都、江戸などの大都市をはじめ、伊勢神宮など各地の著名な社寺に立ち寄り、途中、富士山にも登りました。8月下旬に陸奥国に至り、仙台、塩屋、松島、金華山などを訪れています。はるか遠い陸奥国の風景は、四郎右衛門の目にとどまったでしょう。この旅に關しては、「あつまにに」(元)郭公御願所図・「郡山絵図」作製のため、安芸国吉田へ出張した際に、用務の合同を使って下図を作り、帰国後に仕上げたものです。作製目的は、藩命ではなく、国元幕府役高須平七の内見に供するためでした。 *①御当職所日記 百四(毛利家文庫19日記22(1780.104))、②馬関支庁記録(県庁蔵前A総務74)、③災害一件(県庁蔵前A警察44)
山口県災害記 -山口県の大災害- (B25年度③)	平成23年3月11日、東日本をかつて見たことのない地震や津波が襲いました。当初「想定外」と言われた災害も、時が経つにつれて、古い記録の中に同規模の災害が記されていたことが分かってきました。 「かつて山口県にも甚大な被害をもたらした災害があったが、忘れ去られようとしているのではないか」 このような危機感のもと、今回、館蔵資料の中から、過去の災害に関する資料を紹介いたします。 *①御当職所日記 百四(毛利家文庫19日記22(1780.104))、②馬関支庁記録(県庁蔵前A総務74)、③災害一件(県庁蔵前A警察44)

伊勢神宮と山口 (B25年度④)	今年は20年に一度の、伊勢神宮の式年遷宮の年です。はるかた歴史をもつ伊勢神宮は、中世に入ると多くの武将や有力者に崇敬され、さらに近世になると御師(おんし)たちの活発な活動もあって、庶民の庶の対象として、しばしばは爆発的な参宮ブームが全国的に巻き起こりました。なんと大までもが参宮をおこなった事例も、数多く知られています。 また山口には、16世紀前半に大内義興が伊勢神宮を御請した、高嶺大神宮(山口大神宮)があり、「西のお伊勢さま」として、九州方面からも多くの信仰を集めました。しかし、幕末にいたり、長州藩が藩府を山口に移し、開門をうけて他国人の山口への出入りを封鎖したことから、小部と台道に大神宮の遷移所を設け、参宮者の便道と、街道沿いの振興をはかることになりました。 ①大内氏宸賞(参宮人送送停止事)毛利家文庫27譜家4、②五木土佐守堂書同16叢書23、③矢田村百姓金津治宗新 伊勢参宮道中手紙(金津家文庫400)、④庫書年表(毛利家文庫17年表37)、⑤村山家文庫20、⑥高嶺大神宮御願座御伝記(近藤清石文庫288)、⑦伊勢道・天保十五申度信(谷口家文庫85-7)、⑧今伊勢御行伝采旧藩記録 寺社伝文20、⑨高嶺大神宮御願座御伝記(近藤清石文庫288)、⑩天神宮遷移所二付須宮(内田家文庫(防府市)2612)、⑪山口大神宮遷移所一付上田家文庫(防府市)123-65)、⑫津市函箱二付山口大神宮遷移所山手江建立願(山内家文庫(牧師館)1257)	△
目安箱の投げ文『暮れ結通告』 -18世紀半ば萩藩の世相- (B25年度⑥)	目安箱は、政治改革の参考にするため広く意見を求める目的で、江戸幕府では8代将軍徳川吉宗が享保6年(1721)に設置した投書箱のこととて、教科書にも出てきます。萩藩でも同じ年に藩校明倫館に設置されました。 紹介する投書は『暮れ結通告』と題された、寛保3年(1743)霜月(11月)のものです。年の暮も押し詰まり、年末のやりくり(暮し)が大変苦しい実情を連句(13首)の形で披露しています。差し出し人の名前はありますが、筆者は明らかに萩藩主で、生活の疲弊ぶりを哀みたらしく書きつらねています。短名は山内禰坂公通(1747年没、享年60歳)です。元文3年(1738)から延享元年(1744)まで萩藩の当職を勤め、その前後にも国元加判役や当役という要職を担った人物です。困窮の時代の様相を、一通の目安箱の投げ文から見えます。 ＊①「暮れ結通告」毛利家文庫 運用物近世後期606(5の)1、②山内九郎兵衛就實 追加(同23譜録 や149)	△
萩藩郡方地理図師 有馬喜惣太伝 -郡方地理図師の誕生- (B25年度③)	有馬喜惣太(1708～69)は、阿武郡生葉村三谷出身。福原家臣有馬八兵衛正光次男。実名武春。藩御用絵師雲谷等達の弟子となりました。享保7年(1722)、芝御前(毛利宗広(松茸)の娘川御用のため御寵となり、元文元年(1736)までの15年間、雲谷家御用としてびびり出仕しました。身柄は紫沢権兵衛(雲谷等直)の改姓名)の旨として、至暦12年(1762)まで26年間絵図方に勤務しました。至暦12年(1762)9月、喜惣太は、その長年になつた功績を認められ、寺社組に取り立てられ、「郡方地理図師」の職名を与えられました。これが、萩藩における、地理と絵図を専門とする技術者に対する肩書きの初出となりました。 喜惣太の役目は、郡方定居にして、防長両国境内の蔵入地・絵図地そのほかの境界について、番録類を照合し、場合によっては絵図を作成して明確にすることであり、代々の交代もあって詳しい者がいないという状況があったのです。喜惣太が「郡方定居」とされた理由は、まさしくこの用務に関する専風の担当が必要とされたためでした。 ＊①譜録 有馬喜惣太武春(毛利家文庫23譜録あ100)、②長府領諸村境目書写(地下上申986～988)、③御問之唐書(毛利家文庫 運用物 近世後期2862/24の223)、④有馬喜惣太藩士取り立ての沙汰書写(同 近世後期2862/24033)	△

家督相続と文書 -とくよくと語る書くべき事もっとも肝要に候- (B25年度⑨)	今回は、当館が所蔵する能美家文書のなかから、家督相続のさい、新田当主の間で、家督といっしょに家伝の文書が引き渡されたことを示す史料、議決(ゆすりじょう)を紹介します。 江戸時代、藩士たちは、家に伝わる文書を大切に保存・継承しなければならないという意識を強くもっていました。武家としての自らの歴史を示し、藩主との関係を証明するものであったからです。家訓の中に、家伝の文書を大切に保存すること、火事の時には一番に持ち出すこと、を明記した家もありました。 萩藩士能美家は、次の当主に家督を相続する際、あわせて家伝の文書を譲ることを議決に明記しました。その中には、藩主との関係を示す文書はもちろんだ、かつて能美家の本地地であった安芸国能美庄に関する中世文書も含まれていました。 能美家は、文書を「よくよく語り履くべき事もっとも肝要に候」と記しています。「嗜置(たしなみおく)」とは、「文書を大切に保存する」という意味で用いられた言葉でした。 * ①能美宣仍議決(能美家文書7-13)、②能美宣久議決(能美家文書7-14)、③能美宣久議決(能美家文書31)
巨漢 龍門好五郎 (B25年度⑩)	江戸時代後期、「龍門好五郎(由五郎・芳五郎)」という巨漢力士がいました。当館の資料では、身長なんと七尺五寸(227cm、別説あり)、好五郎は文化4年(1807)、現在の山口県大島郡周防大島町家原(かほう)に生まれ、天保4年(1833)2月に故郷で亡くなりました。諺の多い彼の生涯をご紹介します。好五郎の力士としての対戦成績は残っていませんが、文政11年(1828)の10月場所(江戸での勅進大相撲)において、相撲は取らずに「腹前(張出前頭)」として土俵入りだけをつとめた記録があります。当時、このような力士を「看板力士」といいました。その巨漢を見込まれたことだったと思われます。 * ①大島郡本邸(幸判本控)、②龍門由五郎伝(御國生文庫2241防長史料13天保2年、25歳の手形)、⑤大洲新報(昭和3年3月15日)(御國生文庫2241防長史料13に収載)
防長古器考の図 (B26年度③)	安永3年(1774)に完成した「防長古器考」161冊は、萩藩が領内規模で行った美術工芸品調査の代表例です。調査対象は藩士・社寺を中心に210家に達します。多くは精密な図入りで大変美しく、一部は彩色も施されています。調査された美術工芸品の多くは現在では失われており、その意味で非常に貴重な図入りの美術工芸品調査報告書となっています。 今回は、この中から、彩色図などを紹介します。 * ①防長古器考総目録ほか(防長古器考1)、②補正成像(防長古器考7)、③大内義興馬上像(防長古器考77)
田植え (B26年度④)	田植えも済み、方々の田んぼでは稲が青々と育っています。今回は、農村において、もっとも大切な行事の一つである「田植え」について、「防長風土注進案」(当館蔵)の記述や「四季耕作図」屏風(当館蔵安部家文書)に含まれる画像を手がかりに、当時の風景に迫ってみます。この屏風絵は長府藩御用絵師・佐山義意の筆になるものですが、描かれた年はわかりません。また、描かれた農村風景は、必ずしも写実されたものではありません。 * ①四季耕作図(屏風(安部家文書1526))
江戸時代の将棋 -萩藩の逸家「真甫」- (B26年度⑤)	江戸時代の初め、萩藩に「真甫」という全国にその名を轟かせた将棋指しがいきました。江戸時代、将棋の名人は、大橋家本家、大橋家分家、伊藤家の三家で世襲されていましたが、真甫は、在野の逸家として、初代伊藤宗春(後の三世名人)と対局したことでも有名です。寛永18(1642)年から慶安2(1649)年にかけて香車落で70番を指し、勝敗は宗春の40勝30敗でした。その時の棋譜が今も多く残っており、その戦いぶりを知ることができます。 今回の展示では、この真甫に関する当館の史料を紹介します。 * ①近衛尚詞書状(毛利家文庫32他家108、②寛永・正保2(1645)年分限帳、③「聞書 上・中・下」(毛利家文庫16蔵書36)

貞享2年地震 -古文書に見る防長両国の被害- (B26年度⑨)	山口県は地震が少ない県と言われていますが、古文書をみてみるといくつかの地震により被害を受けていることが分かります。なかでもフイリビシ海プレート先端部の地下で起こる安芸灘・伊予灘を震源とする地震は、明治38年(1905)や平成13年(2001)など、近年に至るまで発生していることが知られています。 今回は安芸灘・伊予灘を震源としてマグニチュード7.0～7.4の規模であったと推定されている貞享2年12月10日(西暦1686年1月4日)に起こった地震の史料を紹介します。 *①「公儀ヨリ坂田出御書附一(毛利家文庫41公儀事342の1)」②「江戸幕府老中連書奉書」(同 運用物近世前期679)③「福岡茂左衛門隆康日記写」(徳山毛利家文庫 福岡隆康日記11)	◎
万歳 -正月のことばぎ- (B26年度⑩)	正月の行事や飾りには、その年の豊作や家々の安寧などを願う、さまざまな折りが綴られていきます。今回(1/7～2/15)は、正月に巡り来て家々を祝賀する「万歳(まんざい)」という芸能、ないしそれをおこなった人々を紹介します。 「万歳」は、滑稽さを強調した芸能として近代化した、今の「漫才」の原型にあたります。 *①「鶴頭の高帽子」(一般郷土資料1706)②「万歳圖」(吉川家文書307)	◎
徳武の世をたると大坂の陣幕後400年- (B27年度②)	慶長20年(1615年)、7月に改元して元和元年)5月8日、天下人豊臣秀吉が心血を注いで築いた大坂城が落城します。秀吉の遺児豊臣秀頼とその母淀君をはじめ、近侍する人々が境と命運を共にしました。攻撃側は、秀吉の後を襲い天下人となった大御所徳川家康とその子で2代将軍秀忠、豊臣と徳川が天下の覇権を争った最終戦でした。一方で戦後は、「元和歴武」(「歴武」とは武器を伏せて用い、ないこと＝太平の世になること)と呼ばれ、徳川氏による太平の世が到来しました。 大坂の陣が終結して400年となる今年。今回の資料展示は、この戦いに関する館蔵資料を紹介いたします。 ①本多正純書状 慶長19年(1614)10月18日(毛利家文庫11軍事9)、②江戸幕府年寄奉書 慶長19年(1614)10月24日(同11軍事3)、③江戸幕府年寄連書奉書 慶長19年(1614)11月10日(同2幕府6)、④毛利宗瑞・秀統連書状写 慶長20年(1615)4月17日(同 運用物近世前期255)、⑤某氏書状 慶長20年(1615)月日未詳(同11軍事6)、⑥毛利宗瑞書状 慶長20年(1615)5月15日(今川家文書163)	◎
文書館動物記 -『密周日乗』の中のふしぎな動物たち- (B27年度③)	文書館には、萩藩密用方(日記「密周日乗」)が大量に残されています。密用方は、毛利家や藩の歴史に関する調査を担当した役所です。日記には、おちにおち密用方や藩内の政治的なうごきや記されていますが、ところどころ、藩内で目撃され、噂になった、動物に関する珍しいできごとが書き留められている場合があります。 萩越ヶ浜に打ち上げられた「せんねん」と呼ばれる怪獣、三隅村野波頭(現長門市)で打ち殺されたおとしせい、上関に現れた人面牛身体「作(くたん)」など、「密周日乗」に記されたふしぎな動物たちの話を紹介します。 *①おとしせい・密周日乗 寛政3年3月2日(毛利家文庫19日記18)②せんねん・同 寛政12年12月12日条、③くたん・同 文政2年5月13日条(同)、④ゴカイ・同 文政4年4月4日条	◎
将軍の代替わりと萩藩 (B27年度④)	天保8年(1837)4月2日、11代将軍徳川家斉は隠居し、家慶が次の将軍となりました(将軍宣下「将軍に任命されること」は同年9月2日)。家慶が江戸城本丸に入るのと入れ替わりに、家斉は大御所「先の将軍のこと」として西の丸に居を移しました。 ところでこの将軍の代替わりは、前回のそれからかなり時間が経過したものでした。家斉が将軍に就いたのは天明7年(1787)のことですから、将軍の代替わりは50年ぶりの実施です。今回の資料展示では、50年ぶりの将軍の代替わりにおける萩藩の動向を紹介します。 *①家斉公御隠居・家慶公将軍宣下 御代替一事(毛利家文庫2御書8)、②公儀坂田出御 天保7年(徳山毛利家文庫 公儀事90)、③家斉公・家慶公御代替将軍宣下二(毛利家文庫2御書10(5の22))、④家斉公・家慶公御代替将軍宣下一(同2御書10(5の1))、⑤家斉公・家慶公御代替将軍宣下三(同2御書10(5の3))、⑥天保十年 御判御頂戴一事記録(同43美日82)	◎

いやす なおす たも つ -近世大名の病と健康- (B28年度③)	近世大名はどのような病気に罹り、どのような治療を受け、どのように健康を保とうとしたのか。このことを知る手掛かりとして、徳山藩2代藩主の毛利元實（もうりもとじつ、1670～1690）の場合を取り上げます。元實の日常は、「御用人」として彼に近侍した福岡隆康（1631～1723）によって詳細に記録された。現在その記録は、『福岡茂左衛門隆康自記写』19冊として、当館所蔵の徳山毛利家文庫に保存されています（詳しくは3代藩主元次卿のもの）。今回の展示では、福岡隆康が記した記録をひもとき、近世大名の病と健康に関する事例の一端を紹介したいと思います。 ＊①福岡茂左衛門隆康自記写（徳山毛利家文庫 福岡隆康自記26-6-8）
藩医たちの診断書 -疫病ではありません！- (B28年度④)	江戸時代、藩士たちは、藩にに対し勤めるべき「役（やく）」義務がありました。たとえば、お城に詰め、警護の任務にあたる「城番（じょうばん）」もそのひとつです。基本的に、定期的かつ順番に廻ってくる役です。しかし、時には体調がすぐれず、城番を勤めることができないケースもあります。そのような場合、藩士は上司へ欠席理由を述べた「次勤届」を提出しました。その際、同時に、病気を証明する医師の「診断書」の添付がルールでした。今回の展示では、この医師の「診断書」を紹介したいと思います。 ＊①三戸家文書23、②藩医栗山幸庵書状・羽田仁彦左衛門診断書（他）三戸家文書29、三戸家文書51
コロリの恐怖 -文政五年の流行- (B28年度⑤)	夏は様々な感染症に注意が必要となる季節です。昨夏には約70年ぶりに国内でデング熱の感染が確認され、今夏はリオデジャネイロオリンピックをはじめ、世界中でジカウイルスへの感染が懸念されています。このような感染症の原因となる様々な細菌やウイルスは、人々の広汎な移動によって国内に持ち込まれるようになりました。今から194年前の文政5年（1822）日本列島に初上陸したコレラもこうした感染症の一つです。当時、コレラに関する知識はほとんど無く、その症状の進行の速さから「三日ころり」「とんころり」などと呼ばれ、人々を恐怖に陥れました。今回は、コレラ初上陸時における秋澤の状況と対応を紹介いたします。 ＊①密周日乗（毛利家文庫19日記18（28の73））、②『文政見聞記』（多賀社文庫1201）、③『諸事日々控』（毛利家文庫31号文政20（37の15）ほか
防長の大坂陣ごぼれ 話 -大坂方武将とその子孫たち- (B28年度⑥)	慶長19年（1614）と20年（1615）の2度にわたり、徳川家康・秀忠父子が率いる幕府軍が、先の天下人豊臣秀吉の遺児秀頼を大坂城に攻撃します。世にいう大坂冬の陣と夏の陣です。その結果、慶長20年5月8日に秀頼が自刃して豊臣氏は滅亡、徳川氏による支那が全国に及ぶこととなりました。周防・長門の2ヶ国を治める毛利氏は、幕府軍の一員としてこの戦いに加わりますが、残された資料からは、大坂方との関係を窺わせる痕跡が見え隠れするのです。 今回の展示では、文書館所蔵の資料から、大坂方として戦った武将やその子孫と毛利氏との関係を垣間見たいと思います。 ＊①後藤左門・後藤又兵衛の子、山口で死す、②明石補郎の子が防長に！？・緒く探索、③佐野道可始末・歳すぎた子への処断、④われら大坂方武将の子孫なり・様々な伝承-
清末毛利家文書 -もうひとつの大名家文書- (B28年度⑦)	当館では、「毛利家文庫」と「徳山毛利家文庫」とともに、「清末毛利家文書」という近世大名家文書を所蔵しています。萩藩の支藩・清末藩を治めた大名・清末毛利家にかつて伝来していた文書群です。清末藩政に関わるものは多くありませんが、清末毛利家の「家」としての活動に関わるものを中心に、明治初期の清末藩・清末期・清末期の当主元輔の伝記史料などのほか、赤間関を描いた絵図、古器物や絵巻、明治儀式を描写した図など、絵画資料を数多く含んでいることが大きな特長です。 今回の展示では、「清末毛利家文書」を紹介いたします。 ＊①口直家（毛利元知代五位下）（慶安4年（1651））、②公務家と置県以来御達書（明治4年（1871））、③御家史料大正10年（1921）、④赤間関絵図（年未詳）、⑤古器物・珍物写図（江戸時代）、⑥毛利元忠肖像画（岡精一作（明治31年（1898）））、⑦萩馬寺縁起絵巻写（永正10年（1513））／江戸時代写

江戸時代のオランダ語学習 -入門書と辞書- (B29年度⑩)	鎖国体制下、西洋諸国の中ではオランダのみ、日本への渡航が許されていました。西洋の科学や地理に関する情報は、中国からもちらされる漢書からも知ることのできたましたが、18世紀後半になると、直接、オランダ語でヨーロッパの字面が学ばれるようになりました。特に、幕末には国防の必要性から、多くの新しい知識や技術がオランダを通じてもたらされ、当時の人々はそのようにオランダ語を学んだのでしょうか今回の小展示では、知識吸収の前提となるオランダ語学習に関する史料を紹介していきます。 *①森島中良の著したオランダ語小辞典『蘭語箋(小田家文庫山口市吉敷41改正増補版)』、②蘭和辞典『蘭語箋(小田家文庫山口市吉敷41改正増補版)』、『ハルマ和訳のコンサイス版で吉田松陰も購入(佐藤家文庫 和漢333館蔵)』、③吉田松陰『蘭語箋(小田家文庫山口市吉敷41改正増補版)』、『ハルマ和訳のコンサイス版で吉田松陰も購入(佐藤家文庫 和漢333館蔵)』、④大村益次郎文庫『ハルマ和訳のコンサイス版で吉田松陰も購入(佐藤家文庫 和漢333館蔵)』、⑤大村益次郎文庫『ハルマ和訳のコンサイス版で吉田松陰も購入(佐藤家文庫 和漢333館蔵)』、⑥大村益次郎文庫『ハルマ和訳のコンサイス版で吉田松陰も購入(佐藤家文庫 和漢333館蔵)』、⑦大村益次郎文庫『ハルマ和訳のコンサイス版で吉田松陰も購入(佐藤家文庫 和漢333館蔵)』、⑧大村益次郎文庫『ハルマ和訳のコンサイス版で吉田松陰も購入(佐藤家文庫 和漢333館蔵)』、⑨大村益次郎文庫『ハルマ和訳のコンサイス版で吉田松陰も購入(佐藤家文庫 和漢333館蔵)』、⑩大村益次郎文庫『ハルマ和訳のコンサイス版で吉田松陰も購入(佐藤家文庫 和漢333館蔵)』
とつて件(くだん)のこととして -予言する正直な怪物- (B29年度⑪)	件(くだん)は江戸時代後期から西日本各地にあらわれ、飢饉等の惨状を予言したり、また日清戦争や日露戦争の前にも姿を現し、日本 の将来を予言したりしたとされます。大正洋戦争時にも広島県の山中や岩国、松山等で出現の噂があったようです。近年の災害時 にも、都市伝説のように件(くだん)の目撃談が語られました。その性質は至って正直で、その予言は外れることがないといわれます。古 来、書状・証文などの最後に「よつて件(くだん)の如し」(前記記載の通りである、の意)と書き記す慣例があります。これはこの件(くだ ん)が正直なことから来ているという説もありました。 今回は館蔵史料の中から、天保7年(1836)に丹後国倉橋山に現れたという件(くだん)と、文政7年(1819)に周防上関に生まれたといっ 件(くだん)の史料についてご紹介します。 *①『密司日集』(文政二年五月十三日条)、『毛利家文庫』(19日記)、『疫病除天草神童圖』(吉崎家文庫415)
錦帯橋をめぐる攻防 -幕吏の巡察と幕藩- (B29年度⑫)	江戸時代、幕府は大名統制の一環として、その領国へ監察を掌る役人を派遣しました。この幕府の役人(「幕吏」)は、將軍の代替わ りに伴って派遣される「諸国巡見使」と、広い領域を所領とする大名家で幼少藩主が相続した際に派遣される「目付」の2種類があり ました。萩藩の幕吏は、防長を防いでいた間、萩城に留まっていたわけではなく、領内各地の巡察に出向きました。特に「錦帯橋」 は、幕吏も「一目見たい」と思っていた間、時には巡見コマをめぐって萩藩と対立することもありました。 今回の展示では、錦帯橋の巡察をめぐる幕府と萩藩との折衝の様子を紹介します。 *①竹内吉左衛門巡見御前日記(元禄9家文庫22御堂42(102071))、②高田目付衆御前日記(元禄9家文庫22御堂42(102041))、③巡見一事(同 22御堂31(4の4))、④錦帯橋一巻(同30御堂29)、⑤御巡見一事(同2御堂32(504))、⑥家斉公、家慶公御代替符軍宣下(同2御堂10(50))
「塵劫記」 -江戸時代の算術書- (B29年度⑬)	「塵劫記(じんこうき)」は、吉田光由(よしだみつよし)が寛永4年(1627)に著した算術の入門書です。数の数え方から始まって、九 九、算盤の使い方、図形の面積の求め方などが、豊富なイラストと分かりやすい文章で書かれています。 今回の展示では、 *①「塵劫記(木版)(果行伝来旧蔵記録 775)

歴、それはなりませ ぬ主(あるじ)を理想的 な藩主にするために- (B29年度⑨)	江戸時代の大名と家臣はどのような関係にあったのでしょうか。家臣は一方的に大名の命令に従わなければならなかったのでしょうか…。資料から獲える両者の関係は、必ずしもそうとは限りませんでした。主君の垂しき行いは家中の藩閥を大きくことになり、ひいては「御家」の安泰を脅かすため、その是正が必要となります。そこで家臣は、主君に対して意見上行を行い、改善を求めました。この行為を一般的には「陳言(のんげん)」と言います。それでは陳言は、どのような内容で、どのように行われたのでしょうか。今回の資料展示では、徳山藩二代藩主毛利元賢(もうりもとけん)とのかたの御正しくて仕えた福岡産廉(ふくまたかた)の日記である「福岡産廉日記」(徳山毛利家文庫)をひもとき、その実態に迫ってみたいと思います。 *①福岡産廉日記巻1 天和2年(1682)3月2日条、②福岡産廉日記巻1 天和2年(1682)2月23日条、③福岡産廉日記巻2 天和2年(1682)10月28日条、④福岡産廉日記巻3 天和3年(1683)2月19日条、⑤福岡産廉日記巻4 天和3年(1683)9月6日条
山口県周辺の不老長 寿伝承 (R元年度②)	当館が所蔵している、山口県周辺のいくつかの不老長寿伝承を紹介し、それらは、 (1)「人魚の肉」を食べたために不老長寿になった (2)ある「目」を食べたために不老長寿になった、(3)ある「果実」を食べたために不老長寿になった、というものです。人魚の夢 あるいは絶望の淵?不老長寿をめぐる物語です。 *①仙崎の八目比佐臣(徳山藩の伝承、「御国通御行権記」第7巻の瀬戸崎の地名由来)、②角島の巨宮「寺社由来」(写真、釈文当館蔵「寺社由来」2000、③赤前国遠賀郡の仙史「美・嶺久路」所収「赤前国遠賀郡庄の浦仙史奉命員のあらまし」当館毛利家文庫29段説41「美・嶺久路」、上関祝島の「こつこう」吉崎家文書427、「祝島こつこう」蓬萊校田所蔵書「内田家文書3493、「祝島こつこう、西本願寺赤布教書簡」
徳山毛利家文庫「木 箱別置文書」の世界 その1 (R元年度③)	平成31年3月、未整理であった徳山毛利家文庫の内、木箱などに収められていた文書を「木箱別置文書」と名付けて公開することになりました。今回公開した「木箱別置文書」は24箱あり、1,467点の資料があります。年代は、判明する限りで、万治期(1658~60)から明治33年(1900)となっており、大きなまとまりのあるものとしては、藩の断絶以前の文書や、再興前後の資料、徳山藩主が幕府ら命を受けて行った、江戸下向公家衆に対する慶弔関係資料、明治33年8月に東京で亡くなった徳山毛利家10代(の)毛利元功の逝去関係資料などがあります。そこで今年度、2回にわたって「木箱別置文書」を紹介したいと思います。今回はその中核のひとつを占める、徳山藩の再興に関する資料についてです。 *①毛利吉元書状享保4年(1719)6月1日(徳山毛利家文庫「木箱別置6-56(6)」、②斎藤侯寛元3年(1690)5月16日(同「木箱別置2-65」、③江戸幕府老中連署奉書享保4年(1719)9月14日(同「木箱別置2-30」、④寛享保4年(1719)12月(同「木箱別置6-56(6)3)」、⑤寛享保4年(1719)12月(同「木箱別置6-56(6)3)」、
改元の伝わり方 -萩藩の場合- (R元年度④)	当館が所蔵する萩藩の記録「公儀事務諸」には、江戸時代(の)改元に関する記事が多数収録されています。それらの記事から、改元の情報(幕府から各大名家へどのように伝えられたのか、そのあり方)を知ることができます。また、萩藩の村役人を務めた家の文書には、藩内の村々(にどの)に改元が伝えられたのかを示す文書が残されています。今月は、萩藩を事例に、江戸時代、改元の情報(どの)にどのように伝えられたのかを紹介いたします。 *①「文政改元年号天保と改元之事」(毛利家文庫41「公儀事務」19「(4)の13」、②「天保改元を伝える同僚御通状と新元号の書付」(同41「公儀事務」19「(4-13)」、③「宝永改元時、江戸域中で順次される新元号」(同41「公儀事務」4「(18-18)」、④萩藩各地への改元情報の伝わり方」(大公儀某外御触書」(佐川家文書「平生即」9)
防長と『万葉集』 (R元年度⑤)	新しい年号「令和」の典拠、『万葉集』初めて漢籍以外、日本の古典から引用されたということでも話題になりました。現存する最古の和歌集ということであえておられる方も多いと思いますが、現在につながる『万葉集』理解は、江戸時代以降に整えられていったものです。出版の隆盛と相まって、『万葉集』をめぐる文化は現在の山口県、防長両国にもやってきました。防長の人がどが『万葉集』をどう受け止めてきたか、『万葉集』を何を見てきたか、その一端を覗いてみましょう。 *①「万葉千歌(佐田家文書)和38(3)、②「防長・長門名所和歌多賀社文庫」(19)、③「南南緑地万葉の森」(19-71)、④「大八洲通訓(毛利家文庫)5文武11(9)」

猪と鼠 -江戸時代、圃ろ村人- (B元年度⑨)	来月、年は新しくなり、干支も亥(いのしし)年から子(ねずみ)へ変わります。江戸時代、村人にとってイノシシとネズミは、農作物に大きな被害をもたらす動物でもありました。当館に、被害に困った村人が、藩に駆除対策を願い、出た記録が残されています。ひとつは、享永4年(1881)瀬戸内海に浮かぶ浮島(現周防大島町)に大量のネズミが発生した事例、もうひとつは天保15年(1844)イノシシ被害に苦しむ岩国領玖郎長谷村(現岩国市)の事例です。イノシシとネズミ、その被害に向き合う江戸時代の村人の姿を紹介します。 *①萩藩大島宰判森村庄屋敷願書(宰判本控4大島郡本控1)	◎
徳山毛利家文庫「木箱別置文書」の世界 その2 (B元年度⑩)	平成31年(2019)3月、徳山毛利家文庫の内、木箱などに収められていた文書を「木箱別置文書」と名付けて公開することとなりました(詳細は今年度第3回資料小展示を御参照ください)。今回はその「木箱別置文書」を紹介する第2弾として、江戸に下向した公家の輩応関係文書を紹介します。 *①「毛利波路守寛書写」弘化2年(1845)9月(徳山毛利家文庫「木箱別置10-2(17の1)」)、②「寛書」文化15年(1818)(同「木箱別置10-2(17の9)」)、③「山科先大納言召共人数書」文化15年(1818)(同「木箱別置11-17(2の2)」)、④「毛利波路守向書写」弘化2年(1845)9月4日(同「木箱別置10-2(17の9)」)、⑤「勘使方伝養手控」年未詳12月(同「木箱別置11-4(2)」)、⑥「御外願之図」文化8年(1811)9月(同「木箱別置11-17(6の2)」)、⑦「公家衆御参城諸図」文化8年(1811)9月(同「木箱別置11-17(6の1)」)、⑧「御能御着席圖」文化8年(1811)9月(同「木箱別置11-17(6の5)」)	◎

【幕末維新】

標 題	展示紹介文、展示資料名(展示項目)、請求番号	メモ
高杉晋作の書状 (B22年度④)	本書状は、安政6年(1859)11月、萩の高杉晋作が、江戸の周布政之助に宛てたもの。同年11月27日の吉田松陰処刑について、防長の恥辱であり、仇を討たいたいと思うが、家や藩主のことがあるので思うに任せず、今後いつそ修行に励み、父母や藩主に忠義を尽くすことが、師の仇を討つことにつながると思う、と記している。 *①高杉晋作書状「周布政之助宛(周布家文書343)」	×
幕末・明治期の古写真 (B22年度⑩)	今回の資料小展示は、館蔵資料の中から、幕末・明治期に撮影された古写真を紹介します。特に、3点のガラス湿板写真(野村靖写真、健武隊士写真、井筒屋栄助ほか写真)は、オリジナル原板として貴重で、その鮮明な画像には目を見張るものがあります。 *①野村靖写真(日野家文書30)、②健武隊士写真(同131)、井筒屋栄助ほか写真(同132)、③新橋五守殿写真(吉田松陰文庫2706)、④毛利元徳写真(桐原家文書220)、⑤青木研蔵写真(日野家文書128)、⑦三条実美写真(同147)、⑧周布政之助写真(吉備家文書152-156)、⑨岩倉使節団写真(毛利家文庫61写真史料97)、⑩大村益次郎肖像写真(大村家文書91)、⑪松下村塾写真(毛利家文庫81写真史料69)、⑫吉田松陰忌辰祭写真(同67)、⑬伊藤博文写真(百富家文書145)、⑭山県有朋写真(同158)、⑮井上馨・杉本七郎写真(同149)、⑯東久世通禧ほか写真(日野家文書129)	×

吉田松陰所用の鏡 (B23年度①)	萩の野山獄に再入獄を命じられた吉田松陰が、その入獄前日に、交流の深かった宇都宮繁森から贈られた鏡です。宇都宮繁森(1824～97)は、幕末維新期の勤王僧。安芸国賀茂郡長坂(現広島県竹原市)出身。諸国を遊歴して、勤王の志士たちと交わり、松陰や頼三樹三郎、梅田雲浜らと親交がありました。討幕を主張した繁森は、松陰に強い思想的影響を与えました。松陰は、自身の肖像画が作られた際に、鏡に自分の姿を映してみて、その出来映えを批評したと言われています。ちなみに、松陰の肖像画は、松下村豊時代に描かれ始め、後の野山獄中でも描かれたようです。この鏡は、その獄中での描写時に使われた可能性もあるのではと、想像をふくらませてみるのも一興でしょう。鏡の包紙の表書きは松陰の、鏡蓋の墨書は繁森の自筆です。 * 吉田松陰題字 宇都宮繁森所贈鏡(吉田松陰関係資料174)
開国(2) (B23年度⑦)	列強の日本接近の背景には、イギリスをはじめとする産業革命がありました。その結果、それらの国々は、国外市場や植民地を求めて、東洋に進出ようになっていったのです。そして、日本の歴史は、世界の歴史と無縁ではなくなりなりました。今回は、ペリーの来航から通商条約締結までの、主として徳山毛利家文庫に含まれる、和親条約・修好通商条約の浦を展示します。 *①垂簾利加国条約(徳山毛利家文庫 条約5)、⑤垂簾利加国条約并税則のうち、「税則(同 条約18 英吉利国條約并税則)」(収載)
幕末のガラス写真 (B24年度⑦)	天保10年(1839)、フランスで「ダゲレオタイプ(銀版写真)」という写真技法が発表されました。「ダゲレオタイプ」が我が国へ伝来したのは、嘉永元年(1848)、長崎の上野俊之丞(彦馬の2代)が、オランダから器材を購入したことが始まりとされています。「ダゲレオタイプ」は、器材や薬品など輸輸入品であるため数量に限りがあり、また撮影時間(露光時間)が長いなどの弱点がありました。その後、嘉永4年(1861)、イギリスでウェットコロジオンプロセスが発表されました。これによって、従来、数分～数十分を要していた撮影時間が、飛躍的に短縮(1分程度)されたのです。この技法は、我が国にも伝わり、湿板写真と呼ばれています。今回の展示は、野村靖写真(写真右)など、3枚の湿板写真の実物を紹介します。目を見張るほど精緻な写真を、ぜひごらんください。 *①健武隆士写真(日野家文書131)、②野村靖写真(同130)、③井筒屋栄助ほか写真(同132)
銃陣鼓譟 -西洋音楽を始め- (B25年度⑦)	江戸時代の末期、西洋式軍隊の整備にともなって、日本に西洋音楽が入ってきました。これにより、人々は、ドラム演奏を中心とした、それまでとは全く違う音楽に触れることになりました。今回の小展示では、その時に作られたドラム演奏の楽譜である「鼓譟」を紹介しします。 *①高嶋流銃陣鼓譟(奈古家文書395)、②改正 鼓譟(長門練兵場蔵版)(一般郷土史料1332)
神代直人の捕縛 -大村益次郎襲撃事件 類末- (B26年度②)	皆さんは神代直人という人物を知っていますか? 神代直人とは、大村益次郎を襲撃し、結果として死に追いやった犯人グループの首謀者とされる人物です。また、伊藤博文の回顧談には、英国船での和議交渉から帰還した高杉晋作と伊藤博文を襲撃しようとしたとら割度したとされています。神代直人は、大村益次郎襲撃後、明治2年(1869)10月に豊後国姫島から山口に帰着した際、官吏に見つかわり、自今回は、この人物の捕縛の真実にせまりたいと思います。 *①野村豊次郎(毛利家文庫 9巻第256号の2)、②諸記録録込(同32巻附17(18の17))、③神代直人口書(「天朝御沙汰一件」同1巻上286の2)、④朝廷工御願出控(同1巻上436の3)

吉田松陰自賛肖像 (B26年度⑩)	紺色の着物を身に著け、胡座にて座る吉田松陰。その右手は書物の頁をめくり、刀は帯ひずに左傍らに置いています。この肖像画は、松陰の弟子である松浦松浦が描き、松陰が自ら實をしたためたもの(自賛)です。安政6年(1859)5月、松陰が幕府の命で江戸へ送られる頃に作られました。 この肖像画のほか、松陰に関係する文書や所用品など、松陰が愛蔵を継いだ吉田家に伝わった「吉田松陰関係資料(吉田家伝来)」754点は、山口県文書館が所蔵しています。これらは、松陰の生涯に関する資料が時代に偏ることなく残り、松陰の行動や思想を知る上で基本となる資料であることから、平成21年(11月7日)、山口県指定有形文化財(歴史資料)に指定されました。 今回の展示では、この「絹本着色吉田松陰像(自賛)」と、松陰が野山獄を出て再び投獄されるまでの間の資料を紹介しします。 ※①絹本着色吉田松陰像(自賛)(吉田松陰関係資料164)、②丁巳日集(同106)	◎
天然痘との闘い (B27年度⑥)	天然痘(痘瘡・痘瘰)は、人類史上の致死性感染症の中で、もっとも恐れられていたウイルス感染症です。伝染力がきわめて強く、昔は大流行を繰り返して多数の死出者を出しました。日本でも奈良時代以来、数多くの記録があります。天然痘は人が一生のうちで一度はかかるものとして「脚匣(おやく)」などとよばれていました。これを終えてやっと一人前になれると考えられ、通過儀礼的な意味をももっていました。 今回は館蔵資料の中から、天然痘に関する資料を紹介します。 ※①童那氏種痘発明百年記念会 報告書「小田家文書(山口市吉敷245)、②好生堂医学引燈沙汰惣毛利家文庫(5武104)、⑤治療新局(ニ)」「岸浩文庫(587)、⑥戒医学史講話はがき 戒済医学館好生堂の長屋門(小川五郎収蔵史料追加)1049-1)、	◎
松陰東送 -「囚人」松陰の江戸送り- (B27年度⑪)	幕府が朝廷の許しを得ずに日米修好通商条約に調印したことを知った吉田松陰は、幕府への批判を強め、安政の大獄により江戸へ送られ処刑されました。山口県文書館蔵の毛利家文庫の中に、松陰が江戸へ送られる際に萩藩側で作成された記録が伝わっています。これらの記録から、松陰を護送する一行は、総勢30名を超える大人数であり、しかも彼らは「随分達者健成前」「別而巧者」などと記される通りすべりの者達であったことがうかがえます。 今回は、主にこれらの記録から、「囚人」松陰の江戸送りかどのように行われたかを紹介します。 ※①藩府申渡書(松陰江戸抱拘送の事)(吉田松陰関係資料380)、②百合之助「吉田寛次郎公儀御時味所存之江戸」通出一件(毛利家文庫35賞罰59)、③吉田寛次郎御時味所存之江戸御呼登一件(同35賞罰57)	◎
大村益次郎への見舞状 -大村益次郎文書「永御願負傷見舞状」- (B29年度④)	明治2年(1869)7月、明治新政府の兵部大輔に任じられ軍制改革に着手した大村益次郎は、9月4日、滞在先の京都で兎俣に襲われます。奇跡的に一命を取り留めた大村でしたが、その病状は悪化し、蘭医ボートワイルからの治療の甲斐なく11月5日に死去しました。当館所蔵「大村益次郎文書」には、角傷した大村に宛て、兵部省や長州藩関係者などが送った見舞状39通が送丁された「永御願負傷見舞状」4巻が残っています。その多くは、事件への驚き、犯人への怒りが綴られるとともに、大村の一日も早い回復を願う内容となっています。大村を巡る人間関係も知ることができそうです。今月はこれら大村への見舞状のいくつかを紹介します。 ※①永御願負傷見舞状(広沢兵助(広沢真臣)・中嶋四郎(佐藤)・嘉彰(仁和寺宮・嘉彰親王))大村益次郎文書42~45)	◎

俳人種田山頭火の新出資料 -新収直理家文書の中から- (B29年度⑥)	このたび、川崎市の直理家から、同家に伝わる古文書650件余りが当館に寄託されました。同家は、特別天然記念物サベツルの渡来地として知られる現在の周南市(八代)に居を構えた武家で、萩藩一門人家の筆頭・宗戸家に仕えていました。家主であった直理正(東京帝国大学で文学専攻、1856-1863)は、教鞭を執るかたわら、『ツルの俳人』ともいわれた俳人で、やまぐち文学回廊梅畑遊協議会『やまぐちの文学者たち』(平成18年3月刊)にも掲載されています。兼太の俳号を持ち、一時は、自由律俳句の萩原井泉水が主宰する句誌『留雲』に投稿することがありました。萩原の弟子のひとりに、放浪の自由律俳人として有名な、山口県を代表する文学者種田山頭火がいます。その関係から、萩原や山頭火、大山澄太などの自由律俳人をはじめとして井伏鱒二や松野自傳など、著名な文学者の書翰類が含まれています。その中から、新出資料として、山頭火の葉書8葉を紹介いたします。 *①昭和8年(1933)9月25日 広島県書簡(直理家文書200)、②昭和8年(1933)9月26日 糸崎一善戸の松上から(同201)、③昭和8年(1933)9月27日 広島の人横畑照雄のところから(同202)、④昭和8年(1933)10月2日 小郡の其中庵から(同203)、⑤昭和8年(1933)10月2日 小郡の其中庵から(同204)、⑥昭和10年(1935)12月28日 岡山県井原町から(同205)、⑦昭和11年(1936)1月31日 尾道から(同206)、⑧昭和12年(1937)1月21日 小郡の其中庵から(同207)	△
明治・大正のレトロ すごろく (B29年度⑤)	さいころを振ってコマを進め、上がりを目指す「すごろく」ゲームは、かつて、子供たちの遊びの定番でした。すごろくでは、子供たちの「あこがれ」や「夢」がゲーム化されており、そのテーマや内容は時代をよく反映しています。今回の展示では、明治・大正期のすごろくを紹介いたします。 *①香万庵記念 鼓道競争すごろく大阪毎日新聞第14943号附録大正14(1925)年1月1日発行(津田家文書653)、②明治及大明治元～三十六年明治35(1902)年11月発行(河崎家文書1373)、③都みやこすごろく(都新聞付録)明治23(1890)年1月1日発行(種山家文書214)、④海陸軍武勇大 大正4(1915)年10月1日発行(種山家文書1856)、⑤訪政大飛行記念飛行双六(大阪毎日新聞付録)内藤家文書588)	△
井伏鱒二・萩原井泉水の書簡 -直理家文書から- (B24年度⑤)	山口県を代表する俳人で、現周南市八代に生まれ過ごして『鶴の俳人』ともいわれた直理兼太(本名正、1895-1963)が、広島県尾道の尾道中学校に英語教員として在籍し、かつて尾道の自由律俳句の同人句会「海光会」に属していた1925～1946年の間に、著名な文学者たちから届いた直葉書簡を、前回の漂白の自由律俳人種田山頭火(1882-1940)の葉書に続いて紹介します。 今回は、広島県福山の出身で小説家として著名な井伏鱒二(本名漢寿二、1898-1993)と自由律俳句の推進者で、句誌『留雲』(1911年創刊)を主宰した萩原井泉水(本名藤吉、1884-1976)の二人の書簡を2回に分けて展示します。 *①井伏鱒二書簡(直理家文書214)、②萩原井泉水書簡(同 208)、③井伏鱒二書簡(同 214)、④萩原井泉水書簡(同 209)、⑤萩原井泉水書簡(同 214)	△
明治時代の修学旅行 -18泊17日間の旅- (B24年度⑩)	日常をはなれ、見知らぬ土地を旅する楽しさは、今も昔も変わりありません。とりわけ修学旅行は、いつの時代においても、児童生徒にとって最も楽しみみな学校行事であり、思い出に残る一大イベントでした。 1909(明治42)年、山口県師範学校において、17日間をかけて関西地方・関東地方を巡る修学旅行が実施されました。今回の展示では、修学旅行後に作成された「旅行記」をおとし、明治時代の修学旅行の様子を窺ってみます。 *①山口県師範学校西へ修学修学旅行記(1910年作)内藤家文書214、②大坂名所遊覧ノ基(昭和4年)一柳郷土史料B306、③三重県(昭和5年)同303、④名古屋名勝案内昭和12(同302)、⑤修学旅行は神戸へ(昭和戦前)戸島家文書(27025)、⑥岐阜案内記(明治36)(一般郷土史料B321)、⑦岐阜案内記(大正12)(同322)	△

近代貨幣の移り変わり 新貨条例から終戦まで (B26年度⑩)	明治政府は、1971（明治4）年、新貨条例を制定し、貨幣の単位を円・銭・厘に改め、純金二分（1.5グラム）を円の定量とし、円の100分の1を銭、銭の10分の1を厘としました。そして、本位貨幣として5種（金貨、補助貨幣として4種の銀貨と3種の銅貨を鋳造しました。現在、私たちが慣れ親しんでいる通貨制度は、この時に始まったものです。 今回の展示では、新貨条例以降、終戦までに鋳造された各種の硬貨のうち、少額面で、日常生活を送る上で身近な「お金」であった「1銭硬貨」の変遷を紹介します。 * 近代硬貨（一銭・半銭）（一般郷土史料1703）
明治時代の県庁書庫 (B26年度⑪)	文書館が所蔵する明治時代の県庁文書（国重要文化財「山口県行政文書」）の中には、表紙下部分に色紙が貼られているものがあります。これは、県庁事務で各課文書を管理する上で、配列位置を間違えないよう、目印として貼られていたものです。 これらの文書は、大正5年（1916）7月に新しい県庁舎（現在の国重要文化財「山口県旧県庁舎」）が出来たまでの間、幕末期に政庁として築造された「山口御鷹形」を増改築した県庁舎の書庫で保管されていた。また、今回は、文書に貼付された小さな色紙から、明治期山口県における文書管理の歴史を探ります。 * ①山口県庁書庫記録係設置図「諸規程」（県庁戦前A総務89）
旅のおもひで 記念スタンプ帳あれこれ (B27年度⑫)	旅の楽しみの一つに、思い出作りがあります。道中で色んな人と交流したり、土産として各地の特産品や趣味の品を買い求めたり、写真を撮ったり、食歩きをしたりと、その方法は人によって様々でしょう。 スタンプ帳に観光名所や鉄道の駅などに置かれたスタンプを記念に捺して保管するのも、そういった旅の思い出作りの一つです。 本展示では、当館所蔵資料の中から主に昭和戦前期の記念スタンプ帳を紹介します。 * ①「タツツツツ」[昭和11～14年（1936～39）]（頼持家文書106）、③「観光記念スタンプ帳」[昭和11～14年（1936～39）]（頼持家文書106）、④「タツツツツ」[昭和11～14年（1936～39）]（頼持家文書106）、⑤「集印帳」[昭和13～16年（1938～41）]（和田政実収集史料83）、⑥「タツツツツ」[昭和戦前期]（松田家文書358）
明治・大正時代の少年少女雑誌 (B27年度⑬)	雑誌は近代社会の代表的なメディアのひとつです。このうち、少年雑誌は明治21年（1888）の『少年園』の創刊を皮切りに明治20年代に各出版社から相次いで発行され、各種の読み物を通じ、教養・娯楽を子供たちに提供しました。また、明治時代後期、女子の進学率が上がると、高等女子校の生徒を主な読者に想定した少女雑誌もあいついで創刊されました。 今回の展示では、明治・大正時代の当館所蔵の少年少女雑誌を紹介し、当時の子供たちがどのような雑誌文化に触れていたかを見てみます。 * ⑦『日本少年』第4巻（木津屋家文書288）、⑧『少女界』（牛ノノ社大正12年3月号）（堀江静子家文書561）、⑨「雑誌挿絵切抜集」（斎藤家文書73）、⑩「自学之友」No.1、2（小野家文書409-6・7）、⑪「コトモ」斎藤家文書（徳地町）74
周防灘台風 公文書にみるその被害と復興 (B27年度⑭)	周防灘台風とは、昭和17年（1942）8月27日から28日にかけて、九州～近畿地方に被害をもたらした台風です。その中でも、特に山口県では、死者・行方不明者数が794名を数えるなど、突出して被害が大きかったことが知られています。 今回は太平洋戦争の最中であつた73年前の8月末、山口県に大きな被害をもたらした周防灘台風について、県庁の公文書からその被害と復興の様子を紹介します。 * ①「風水害一件」（県庁戦前A土木追加50）、②「風水害状況」（同戦前A土木追加55）、③「災害一件」（同戦前A警察44）

大正時代の学習ノート (B27年度⑩)	教科書とノートは、子供たちにとって一番大切な勉強道具です。これは今も昔もかわりありません。とりわけノートは、授業中に黒板を書き写し、漢字の書き取りや計算練習をし、作文を書き、観察日記を付けるなど、まさに勉強の跡そのものです。各時代のノートを見比べると、学習内容ばかりでなく教授方法の違いも見えてくることができ、その意味でノートは各時代の姿を反映していると言えるでしょう。今回の展示では、義務教育がほぼ行き届いた大正時代の小学生のノートを紹介します。あわせて当時使われた文房具を紹介し、当時の子供たちの学習の姿を見てみます。 ※①綴方帳(徳田家文書(山口市B23)、②算帳(同B26)、③読み方練習帳(同B23)、④大正時代の筆記用具(同B25、B26、B25A)、⑤算術練習帳(同B27)、⑥尋常小学校算術書(第三学年用教科書文庫-明治43(B20))、⑦算術科(理科書)算術書(第三学年教科用(同-大正6(B6))、⑧算術帖(徳田家文書(山口市B23B)、⑨算術(定規(同B25)、⑩理科書(理科のノート(同B24)、⑪尋常小学校算術書(算術科教科書文庫-昭和49(B6))、⑫地理帳(地理のノート(徳田家文書(山口市B24)、⑬尋常小学校地理書(州図)(中村家文書(山口市徳田)B2)、⑭図面練習帳(徳田家文書(山口市B24)、⑮(図面)(重(同B45))、⑯尋常小学校「新定画帖」(同B246～B248)、⑰裁縫帳(同B243)、⑱裁縫教科書(第一～三)渡邊辰五郎編輯(教科書文庫-明治30(6～8))
戦前のオリンピック (B28年度⑥)	走る、投げる、跳ぶ、泳ぐ、打つ、闘う、演じる。世界中のトップアスリートたちが、一瞬、一瞬に全身全霊を傾けて戦い合うその姿は、見るものに大きな感動を与えます。だからこそ、時代を超えて変わらない、オリンピックの本質的な部分と言えるでしょう。一方、オリンピックを取り巻く環境は大きく変化し、時代と共にその姿を少しずつ変えてきました。今回の小展示では、1932年(昭和7年)のロサンゼルスオリンピックを報じた新聞(号外)を紹介いたします。今から80年以上前のオリンピックと現在のオリンピックの共通点や相違点を眺めてみましょう。 ※①「大阪毎日新聞 昭和7年7月3日号外-8月7日号外-8月8日号外-8月18日号外」(新聞文庫 大阪毎日B)
100 歳になりました た、重要文化財『旧県庁舎・県会議事堂』のよもやまはなし (B28年度⑦)	今から100年前、大正5年、山口の地に新しい「県庁舎」と「県会議事堂」ができました。設計を依頼されたのは、工部大学校造家学科(現在の東京大学工学部)、「アメリカのコーネル大学で建築を専攻した 妻木頼黄(つまさきよりなか) 率いる、名うての建築エリート集団「大蔵省臨時建築部」。妻木部長のもと、国会議事堂の新築設計をめぐっていた臨時建築部所属の建築技師大熊喜判(佛造)と武田五一(意匠)を中心に、山口県庁舎・県会議事堂の設計は進められました。今回の展示では、10数冊の県庁文書などを手にかかり、設計から落成・開庁に至るまでの秘話を紹介してみます。 ※①建築概要「通商県会議事堂・明治44年」(県会議事録57号)②建築概要(柳井市村上家B19)、③県庁舎建築二関スル往復二件附復命書(其の二)(県庁蔵前入士本B36)、④大正2年 県庁舎建築二関スル 本件一件(同蔵前入士本B44)、⑤大正2年 県庁舎建築工事用 陳白一件(同蔵前入士B44)、⑥落成記念写真帖(明城文庫B05-大島佐川家B30B)、⑦「地蔵堂」案内はがき(「建築地蔵堂」一件)「県庁蔵前入士本B46)
大正11年の貞明皇后 行啓と山口県 (B29年度⑥)	貞明皇后(ていめいこうごう)は、大正天皇の皇后にあたります。大正11年(1922)3月、「今上陛下御病氣平癒御祈願」と「摂政宮殿下無事御帰朝(ヨーロッパ訪問)御礼」のために、九州福岡の香椎宮・箱崎人幡宮・太宰府天満宮への貞明皇后の行啓が実施されました。御召列車による往路(福岡への熱気)は三田房の公卿・毛利邸に御宿泊、帰路(神戸までは海路利用)は安下庄湾口に碇泊した御召艦「摂津丸」に御宿泊、沿道各地では数々の「奉迎会」がとりおこなわれました。 山口県文書館には、この行啓にまつわる行政文書(県庁文書)と『記念写真帖』が所蔵されています。行幸啓には国内各地の産業や教育の実情把握という目的もありましたので、今回の展示では、献上品や台覧品から、当時の山口県の物産についても掲載することになります。 ※①皇后陛下下行啓一件(県庁蔵前B21)、②皇后陛下下行啓二関スル書類(同蔵前B22)、③台覧品一件(同蔵前B23)、④皇后陛下下行啓献上品一件(同蔵前B24)、⑤写真帳(御持家B79)

ついに実現！第1回 国勢調査 (B元年度⑦)	今月は、わが国の「はじめての国勢調査」に焦点をあてます。調査員として最初の国勢調査に携わった近代地域社会の有力者の家に伝わった記念品的な資料を展示します。国家にとつての国勢調査実施の意味・実現に至るまでの苦難の道のり、調査をなしとげたための工夫、調査実施当時の世相や世間の受けとめかななどを紹介します。「なぜ大正9年に調査が実施されたのか」を考えることにより、調査の真意をさぐることもできます。同時に、政策を浸透・徹底させるために用いられた種々の情報宣伝活動の危うさについても考えてみたいと思います。 *①日本国勢調査記念館(和泉県)、②記念結葉書(和泉県2)、③国勢調査解説(藤津家435)
	◎

【現代】	
標 題	展示紹介文、展示資料名(展示項目)、請求番号
文書館にもサントさん！ (B27年度⑨)	「県政だより」は、かつて山口県(知事公室広報班、文化広報課、総務部県民室など)が発行していた広報用ポスターです。当時は「新聞」と呼ばれていました。創刊は昭和24年(1949)12月。以後毎月発行され、市町村を通じ県下各地に配布・掲示されました(発行部数6000部)。文書館には、昭和34年4月発行のNo.122までが保存されています。いずれも1950年代の世相、社会状況を知る貴重な歴史資料であることはもちろんですが、そのポップな図柄は、ひとつの美術作品としても楽しめます。すべて当サイトのデジタルアーカイブでご覧いただけます。今月の展示は、この「県政だより」から、12月に発行されサントクロースをモチーフとした、No.14(昭和25年)と、No.65(昭和29年)を紹介します。よいクリスマスです！ *①県政だより12月No.14(ポスター昭和25-7)、県政だより12月号No.65(ポスター昭和29-23)
◎	◎
天然記念物 日本犬 (B28年度②)	柴犬・紀州犬・四国犬・北海道犬・甲斐犬・秋田犬に大別される日本犬、家族の一員である愛犬や、散歩先などで見かけるお気に入りの日本犬は、実は国の天然記念物に指定されています。これらの歩く天然記念物を保護する団体として「日本犬保存会」があり、同会が主催する展覧会は、天然記念物としての日本犬の特質を保持する役割も果たしています。 *①天然記念物 日本犬展覧会(県庁戦後人県教委939)、②日本犬関係(同941)、③天然記念物 日本犬(同945)
◎	◎
大阪万博 (B28年度③)	1970年(昭和45)に大阪の千里丘陵で開催された日本万国博覧会(エキスポ'70、以下大阪万博)。「人類の進歩と調和」をテーマに77か国が参加し、入場者は6,400万人に及ぶ。高度経済成長時代の最後を飾る一大イベントでした。現在年齢が50歳代以上ならば、実際に体験された方も少なくないかもしれません。本展示では、大阪万博に関する資料を各ペリオンで配られたリフレクト類を中心に紹介します。これらの資料を見ると、当時の国や諸団体が何を残したかったかがよくわかります。また、面白いエピソードからは当時の雰囲気を感じることができます。 *①「日本万国博覧会案内」和田敏英(史料265(22)の3)、②EXPO'70日本万国博覧会ミニマップ(同265(22)の4)、③インド 明日との出会い(インド館資料)(同265(22)の7)、④平和政策の心(エト連邦館資料)(同265(22)の17)、⑤「フランス館案内」(同265(22)の18)、⑥「日本館案内」(同265(22)の20)、⑦「日本政府出展日本館案内」(同265(22)の22)、⑧「中華民国館案内」(同584(27)の5)、⑨「ベトナム館案内」(同584(27)の7)、⑩「ヨーロッパ共同体系内」(同584(27)の12)、⑪南 蛮まつり〜ポルトガルと日本〜(同584(27)の18)、⑫「サウジアラビア館案内」(同584(27)の20)
◎	◎

昭和のやまぐち -昭和39年東京オリンピックのころ- (元年度⑥)	東京オリンピック・パビリオン・パビリオン開催まで、1年を切りました。前回、昭和39年(1964)の東京オリンピックでは、9月18日から3日間をかねて、山口県内を聖火リレーしました。県内各地で聖火を迎える歓迎行事が間かれ、オリンピックムードが高まりました。今回の展示では、前回の聖火リレーの様子を当館蔵資料から見てみます。 * ①「聖火リレー関係」行政文書戦後4庫蔵番1330。②聖火入城(教育館蔵)1964年5月号。③初日最終走者(教育館蔵)1964年9月号。④2日目最終走者(教育館蔵)1964年3月号。⑤周南市戸田付沢(果政やまぐち)1964年10月号。⑥記念植樹画(山口市会場)(教育館蔵)1964年9月号	◎
昭和のやまぐち -昭和39年東京オリンピックのころ- (元年度①)	来兵、東京で2度目のオリンピックが開催されます。前回は昭和39年(1964年)に行われましたが、山口県では、その前年に第18回国民体育大会(山口国体が)開催されており、2年続けての大きなスポーツ大会となりました。今回の展示では、当館所蔵資料から当時の様子をふり返ってみます。 * ①防長路を駆け抜けた聖火号(写真は周南市戸田付沢です。「県政やまぐち」1964年10月号「60企画255」)。オリンピックの気運を高めるために「オリンピック旗本(小学生のために)」(60企画664)。「オリンピック旗本(高等学校向け)」(行政資料60企画63)。「オリンピック号わかし(平田豊彦48年)」「オリンピック手帖」(平田豊彦48)。②テレビ放送と受信機(田坂英収資料328-2、文書館図書780、4、総天然色の公式記録映画)と田坂英収資料328-3(4)	◎
大阪万博 ② (29年度⑤)	1970年(昭和45)に大阪の千里丘陵で開催された日本万国博覧会(エキスポ'70、以下大阪万博)。「人類の進歩と調和」をテーマに77か国が参加し、入場者は6,400万人に及ぶ、高度経済成長時代の最後を飾る一大イベントでした。現在年齢が50歳以上ならば、実際に体験された方も少なくないかもしれません。本展示では、第10目に引き続き、大阪万博に関わる資料を各パビリオンで配られたリーフレット類を中心で紹介いたします。これらの資料から、当時の祭典感を感ぜようとしてみてくださいます。 * ①「週間朝日」第667号臨時増刊日本万国博覧会(平)1970-2-25和国博覧会収集史料265(220(6))。②the 伊太利亜(イタリヤ館資料)(同265(220(6)))。③BRITAIN EXPO'70 70年国博覧会(日本万国博覧会)4MAP OF GREECE ATHENS-THESSALONIKI(同265(220(1)))。④GOD IS LOVE(イ・ラブ・イ・ラブ館資料)(同584(27(4)))。⑤キーパ、新しい人間像に向って(同584(27(8)))。⑥夢の海岸線(同展示館)(同584(27(8)))。⑦エニジーランドパビリオン(イ・ラブ同584(27(10)))。⑧発見されるべき新世界(同584(27(11)))。⑨ウガンダに於ける貿易及び投資の概要(同584(27(22)))。⑩三蔵未来館案内(同584(27(25)))。⑪(生活産業館案内)(同584(27(26)))	◎

【シリーズアーカイブズを守る】

標 題	展示紹介文、展示資料名(展示項目)、請求番号
山口殿中文庫 -大内氏と文書保存- (21年度①)	中世に現在の山口県を支配した大名大内氏は、公文書の重要性を認識し、文書によって事実関係を確定したり、意思を伝えたりする「文書主義」をとっていました。そのために公文書の写しを作成・保管して、上覧に備えるよう、「殿中文庫」であつたと考えられます。この推論が正しければ、「山口殿中文庫」という名称は、大内氏領国の首都である「山口」に置かれた「殿中」(大内府の中心的な建物)に設けられた「文庫」という、歴史的にもアーカイブと呼ぶにふさわしいものだったこととなります。今回の展示では、この「殿中文庫」を中心に大内氏の文書保存に関する史料を紹介します。 *①興隆寺文書納箱複製書、②興隆寺修二月会頒授文書(複写資料178)、③大内義弘雷道状(複写資料178)、④大内殿前制札類(複写資料274)、⑤大内家庭書(複写資料273)、⑥大内家諸逗留書(複写資料273)

萩藩の文書管理 -勝手に来てるな- (B21年度②)	文書館には、江戸時代の萩藩や徳山藩で保存・利用されていた文書記録が膨大に保存されています。それが毛利家文庫、徳山毛利家文庫であり、総数はそれぞれ、5万点、4万点と言われています。 各藩の役所では、仕事上、先例が重視されたため、過去の文書記録をきちんと保存管理することが重視されていました。また膨大な文書記録を勝手に文書記録を廃棄したり、反古紙として使うことは禁じられ、藩上層部への申請、許可が必要とされました。また膨大な文書記録を管理するため、文書整理や文書目録の作成も継続的に行われました。文書管理専門の役人が置かれるケースもありました。 現在、今から150年から400年もの前の藩政文書を利用することができるのは、当時のそうした文書管理のルールがあったからこそなのです。 ＊①28冊御書付、②御書付控、③目録類	×
1166冊の日記 -徳山藩御蔵本日記- (B21年度③)	当館所蔵文書の核になるものとして藩政文書の一環があります。その中に、萩藩の藩政史料である毛利家文庫とともに文藩徳山藩の藩政史料「徳山毛利家文庫」があり、平成4年度までに『徳山毛利家文庫佐目録』Ⅰ～Ⅴが刊行済みです。その数1万4千点余りの中に日記類が多く含まれており、そのほとんどが原本であるというのが、毛利家文庫と比較しての特長です。中で最も興味を抱かせるものの一つに「御蔵本日記」Ⅰ、166冊があります。書庫における書架迎送長の距離は、縦置きで約40mにもなります。 当職(家老)の語める政務局があつかう広範な事項を記録し、当時の社会状況をよく写し取っていて大変面白い内容を持ち、元禄元年(1688)11月～明治元年(1968)4月がこのこりです。 ＊①元禄元年11月分、1166冊中最古のもの(徳山毛利家文庫、御蔵本日記Ⅰ)、②明治元年3・4月分、1166冊中最終のもの(同1165)、③年月不詳分、1166冊中唯一年月不詳とされるもの(同1166)、④正徳2年(1712)正月分の役人付(同101)、⑤宝永5年(1708)5月分、文政11・12年に行われた整理作業のあったことを示す書込み、⑥享保10年(1725)正月分、1月15日「節類」に招かれた地方、町方役人名	×
絵図を作った男たち -萩藩絵図方の執業- (B21年度④)	江戸時代、萩藩には絵図方という、絵図作製を専門とする技術役職がありました。彼らは、幕府の命令による国絵図はもちろんのこと、御内の郡・村の絵図を始め、城下町絵図・普請絵図・建物差図・街道絵図など、数多くの絵図とその関係文書を手がけました。その数(1)は、明和2年(1765)時点、絵図が1152件・1,025点、関係文書が210件・3,095冊に及んでいます。 萩藩の各役職において、過去の記録管理は重要とされていましたが、絵図方もこの例にもれず、作製した絵図の管理をきちんと行っていました。絵図方が管理していた絵図類の台帳は、「諸役所控目録」2冊、「絵図石高附地下由來寺社日記根帳」3冊の計5冊が残っています。もちろん、これらが絵図方作製の絵図を網羅するものではありませんが、これらの台帳から、絵図方がどのような種類の絵図を、どのくらいの数作っている絵図は件数にして約12%です。また、現存しているものと伝来の過程等で失われてしまったものについても知ることが出来ます。現存している絵図は件数にして約12%です。 ＊① 諸役所控目録Ⅰ、② 絵図石高附地下由來寺社日記根帳(県庁伝来旧藩記録945～947)	×

	50万点近い山口県文書館所蔵の文書の中に、焼け焦げた、一群の文書があります。見る者を「ドキッ」とさせる、これらの文書は、文書館が火災にあったからというわけではなく、昔、文書館の先輩が、県庁文書の野焼きの際に、貴重な文書が焼かれるのを聞き、現場に駆けつけ、慌てて火を消し収集したものだと言われています。 展示中の「土族金禄調帳」もその中の一つです。明治68年(1875年)の記録で、昭和の時代になって焼却処分されかかったものです。翌明治9年、秩禄処分が断行されますが、その過程を物語る貴重な文書です。 貴重な文書も、一度失われてしまったら二度と元に戻りません。これらの焼け焦げた文書は、「文書は遺さなければ残らない」と言うことを、あらためて私たちに語りかけているようです。 ※①土族金禄調帳(県庁戦前入士族149～150)	
	山口県の市町数は、1月16日の山口市・阿東町の合併により、19の市と町となります。これにより、平成15年の周南市誕生前の56市町村時代と比較して、数の上では約3分の1になりました。 市町村合併が進む中で危惧されるのは、合併前の市町村が作成してきた文書が、合併後の紛失や一括廃棄により、後世に伝わらないことです。そのようなことのないよう、様々な努力が先人によってなされ、文書館もその一翼を担ってきました。 今回の展示では、明治22年(1889)に行われた「明治の大合併」、昭和30年(1955)前後に行われた「昭和の大合併」と呼ばれる2度の大規模な市町村合併に関して、文書館が所蔵する文書を紹介します。 この展示により、行政文書や行政資料が貴重な歴史資料となることを改めて感じていただくと共に、後世の人々に、「平成の大合併時の文書がない」、と言われないためにどうすればよいかを考えるきっかけとなれば幸いです。 ※①要用記録(県庁戦前A総務837)、②雑録(同838)、③町村分合財産処分上申(同842～851)、④戸長事務引継がし居(同852～855)、⑤町村分合衆郡長及戸長答申書(同841)、⑥町村分離一件(同856)、⑦町村内紛提一件(同859)、⑧赤間開門司合併建議案(同863)、⑨町村制(県庁戦前B1108)、⑩町村制一件(都役所文書豊浦部111)、⑪市町村制施行記事(県庁戦前A総務部167)、⑬町村合併促進審議委員会概要書(同168)、⑭町村合併協議会設立届(同169)、⑮建設計画書(同170～187)、⑯県政のしおり(行政資料1950年代総務25～28)、⑰県政たより10月号No.50(ホスタ-昭和28-17)	×

【文書館資料にみる幕末・明治の人・物・文化】

標 題	展示紹介文、展示資料名(展示項目)、請求番号	ウ エ ィ
『維新の三傑』と山口とビール (B29年度⑩)	「維新の三傑」とも称される大久保利通、木戸孝允、西郷隆盛。当館蔵・毛利家文庫の中に、彼らが明治3年と4年、山口の地でビールを飲んだことを示す記録があります(毛利家文庫「勤使岩倉卿御下向一件」〔御奥日記〕)。明治初期、ビールはまだ高価で、特別な味でした。というわけ。 ※①明治4年1月、大久保・西郷、岩倉に随行し山口へ。11日、毛利家からビールを供される。勤使岩倉卿御下向一件(毛利家文庫1震上68、②明治3年4月12日、木戸・広沢、知藩事毛利元徳からビールを振る舞われ、酔う。御奥日記(毛利家文庫19日記50)	◎

『明治双六』でたどる近代日本 -1868～1903- (B29年度⑩)	さいころを振ってコマを進め、上がりを目指す「すごろく」ゲームは、かつて、子供たちの遊びの定番でした。この「明治双六」は、明治元(1868)年の「王政復古」を振り出しに、1年ずつコマを進めていき、明治36(1903)年の「第五回内国勲業博覧会」を目指す。各年毎にその年を象徴する出来事や文物が、明治時代の人々の目線で印象的に描かれています。明治時代の人々が、明治期の日本の歩みをどのように捉え、感じていたのかを、この「明治双六」で見えてみましょう。 * ①明治双六「明治36(1902)年11月発行(河崎家文書1373)
奇兵隊士のいでたち (B30年度⑪)	当館の「元森家文書」から、奇兵隊士だった元森熊次郎の軍服・軍服着衣の写真・奇兵隊の袖印を紹介します。「元森家文書」は諸隊士のもととなった遺品として貴重で、軍服を納めた箱の蓋裏書や書簡からは、彼の活動の裏付けがうかがえます。 * ①元森熊次郎軍服および納箱(元森家文書44)、②元森熊次郎写真(元森家文書43)、③袖印「長藩奇兵隊元森熊次郎番附」(元森家文書9)
新収資料紹介 長井家文書 -書状にみる長井雅楽- (B30年度⑫)	幕末、幕藩(長州藩)の政治を主導した人物のひとり、長井雅楽(時庸)はあまりにも有名です。彼は「航海遠略策」を掲げ、公武の和合を断えましたが志半ばで先逝し、文久3年2月6日、藩命により自決しました。享年45歳。ところで、幕末史における長井雅楽の政治的活動はこれまで注目されてきましたが、彼の「人となり」についてはどうでしょうか。このたび当館に寄贈された長井家文書には、雅楽と家族との間で通り取りされた30通あまりの書状が含まれています。そこには、夫として、父として、長井家の長としての雅楽の「思い」が、また家族の間だからこそ表せた「本音」がしまわれています。今回の展示では、「政治家」としての長井雅楽からは離れ、家族を持つひとりの「人間」としての一端を御紹介いたします。 * ①長井時庸書状(年未詳)11月25日(長井家文書193(1の4))、②長井時庸書状(年未詳)正月29日(同193(1の8))、③長井時庸書状(年未詳)3月12日(同193(1の8))、④長井時庸書状(年未詳)6月8日(同135)
幕末の町 -トコトシヤレ節・ちよぼくれ節- (B30年度⑬)	幕末期の多くの事件は、文字で書かれたもののほかに、調子のよいセ・五調にのせて歌われ、また語られて人々のあいだに知られていきました。ここで紹介する「ちよぼくれ」もそのひとつです。「ちよぼくれ」は江戸時代後期に説経節や人形浄瑠璃・歌舞伎の「クドキ」の影響を受け、タイムリーな語調を聴きにおもしろおかしく、興味をそえるように聴かせたもので、各地で起きた事件を題材に作られ、歌われ(唄)りました。まさに今日でいうニュースの一形態といえるでしょう。当館の塩田家文書にのこる、「大田・絵堂の戦い」を題材にしたちよぼくれを紹介いたします。 また慶応4年(1868)、戊辰戦争が始まると、長州などの倒幕軍(新政府軍)の立場で歌った「宮さん宮さんお馬の前にはヒラヒラするの」は何じやいぬ あれは朝敵征伐せよとの唄の御真じや知らないか「トコトシヤレ、トシヤレナ」で知られる「トコトシヤレ節(トシヤレ節)」が流行しました。作曲は大村益次郎ともいわれるもの確認はありません。作詞は品川弥二郎です。 * ①「都風流トコトシヤレ」(輸物箱80)、②「美梓郡大田絵堂唄ちよぼくれ節」(塩田家文書1029)、③佐川家文書(大島町)143

明治初年 大村益次郎の手紙 (H30年度④)	当館所蔵「大村益次郎文書」の中に、幕末から明治初年にかけて、木戸孝元をはじめとするさまざまな人びとから大村に宛てられた多数の書状とともに、大村が父に宛てた書状9点、妻葵に宛てた書状4点が残されています。後年大村は、その功績から、「近代軍制の創始者」「軍神」とも称される人物です。また司馬遼太郎『花神』では、天才的な軍才をもった合理主義者、ただし無愛想で少し気難しい人物として描かれています。当館に残る父や妻宛ての書状からは、等身大の大村を垣間見ることができます。今月はその中から、明治2年(1868)8月25日に妻葵へ、10月18日に父へ宛てた大村の書状を紹介します。大村が滞在先の京都で兎使に覆われ(9月4日)、その傷が元で命を落とす(11月5日)直前の手紙です。儼然家としての大村、父親思いの大村の姿をそこに見ることが出来ます。 *①明治2年10月18日大村益次郎書状(父宛て)(大村益次郎文書37)、明治2年8月25日大村益次郎書状(妻葵宛て)(後半部分)(同41)
近代に預られて行成文書(神社関連資料)にたどった時代の雰囲気- (H30年度⑤)	今月の資料小展示では、当館所蔵の重要文化財「山口県行成文書」のうち、神社関連資料に焦点をあてて、「先人の功績を称える」「先人に学ぶ」「面影を慕う」という時代の雰囲気を読み取ってみたいと思います。「神社事務」「官国幣社一件」に経じこまれた、神社の創建や社格の昇格申請にまつわる「由緒書・境内早取図・建築図面・建築仕様書・写真」などを紹介することになります。 野田神社(山口市)、吉香神社(岩国市)、祐綏神社(周南市)、松陰神社(萩市)、乃木神社(下関市)、伊藤神社(光市)の事例として取り上げます。「顕彰」や「神格化」に映された時代相を理解することが出来ます。 *①野田神社神祇写真(「官国幣社」大正6年「神社年報」第60号)、②野田神社神設立面図(「神社事務」明治17年「同68号)、③吉香神社移転新築仕様目録(嵐(神社事務「同68号)、④祐綏神社全景(「県社以下神社」大正4年「戦前」A194)鹿山「写真師林」撮影、⑤松陰神社境内早取図(「県社以下神社」明治40年「戦前」B621)、⑥松陰神社創立願(「県社以下神社」明治40年「同621)、⑦乃木神社別格官格社昇格願(「県社以下神社」大正11年「同650)、⑧えはき(「伊藤神社と伊藤公記念館」(「県社以下神社」大正12年「同651)
万国博覧会参加の記録-1893年シカゴ万国博覧会- (H30年度⑥)	万国博覧会は1851(嘉永4)年、ロンドンではじめて開催され、その後、ヨーロッパ各国でたびたび開催されました。万博には、最先端の工業製品をはじめ、諸外国の物産が出品されたことから、万博は「西洋各国の物産に触れ機械技術を伝習する場」、また「日本製品を紹介し諸外国へ売り込む場」と認識され、日本も積極的に参加しました。 今回の展示では、「1893(明治26)年シカゴ万博(開港(コロッセオ)世界博覧会)の資料を紹介します。 *①シカゴ万国博覧会図(「万国博覧会」日本館)臨時博覧会事務局報告書(福山家文書1960)、②ワグネル・セウリ(毛利安子)あて英文書状(毛利家文庫58巻図1148)、③臨時博覧会事務局報告書(福山家文書1942)、④シカゴ万国博覧会委員メダルおよびプルミエール(毛利家文庫58巻図1148)、⑤山口県内の変遷者一覧(「官報」より作成明治27年[1994年]4月9日〜18日)
明治期 華族の日常 (H30年度⑦)	「明治」の世を迎え、江戸時代の大名は「華族」となりました。時代の変化に伴って、彼らもこれまでとは違った生活を送ります。今回の展示では、文書館所蔵の毛利家文庫の中から、これまであまり知られてこなかった明治期の華族の日常を紹介します。 *「毛利家文庫58巻図115(徳興日記)①明治のかわり(明治11年1月1日条、明治27年9月13日条)、②つとめ(明治23年11月29日条、明治17年1月1日条) ③山口県とのつとめ(明治18年11月2日条、明治19年12月18日条)、④諸室へのたしなみ(明治19年9月27日条、明治19年7月9日条)、⑤催し、茶会(明治16年5月30日条、明治26年11月5日条)、⑥日々のたしなみ(明治23年4月8日条、明治23年2月22日条)

明治期の県布達 -掲示版で知る、読む- (B30年度⑨)	明治時代、県は県民に対し数多くの布達を出しました。その内容は法令や規則に止まらず、遺失物や漂流船の情報、犯罪者の人相書なども含むものでした。テレビもインターネットもない時代、それら布達は、各地に設置された掲示版を使って県民に周知される時期が長く続きました。山口県の場合、他県と比べ掲示版の方式が長く用いられてきましたが、明治26年掲示版は廃止され、その役割を終えました。今月は、明治期の県布達とその掲示版に関する資料を展示します。 ※①掲示版の立地と規格(山口県布達⑨)、②読み方(ひし)が付いた布達(旧県史編纂所史料214)、③手書きの布達と印刷された布達(美術館役所文書16・山口県布達28)
明治期の灯台 (B30年度⑩)	本州最西端に位置する山口県は、北に日本海、西に響灘、南に瀬戸内海が広がっています。なかでも、九州との間にある関門海峡は古くから海上交通の要衝で、さまざまな航路標識(広義の灯台)が集中している地域です。特に、ヨーロッパ商船の航行が増え、「タワーク・シー」(暗い海)と酷評された明治初期、響灘沿岸と関門海峡には、日本政府の要請によりイギリス人技術者集団の手によっていち早く洋式灯台が整備されます。その光茫は、まさに海における文明開化のシンボルでした。その中には、今も重要な航路標識として立派に機能している灯台が多く存在します。それらが海上交通の安全を支えた長い歳月は、島や海の自然に溶け込んだ優美な姿とともに、人々の心を魅了し続けています。本提示では、当館所蔵資料の中から山口県の明治期の灯台に関連する資料を紹介します。 ※①丸尾崎灯台堂設計図(御坂家文書151)、②丸尾港遠景(昭和初期)〔毛利家文庫B1写真120〕、③〔御雇英国人プラント・浮標設置につき通達〕(同9諸省577(14))、④〔灯明台建築につき通達〕(同9諸省577(35))、⑤〔灯標私設禁止につき通達〕(明治期政府布達類350)、⑥〔航路標識便覧表(備山家文書1488)〕、⑦〔大連島灯台建築地所点線につき通達〕(毛利家文庫9諸省577(13))、⑧〔大連島灯台落成につき布告〕(同9諸省577(15))、⑨〔大連島灯台写真〕(県庁文書戦前A社寺追加18)、⑩〔角島灯台敷地買上につき指令〕(明治期政府布達類196)、⑪〔角島灯台建築用地買上代金下渡しにつき通達〕(同349)、⑫〔第十七大区品像互石陳設(県庁文書戦前A総務169)〕
貌 -描かれた近代・撮された近代- (B30年度⑩)	明治の訪れ、それは近代という時代に入りびとが足を踏み入れた、時代の舞台転換のそのときでした。今月の資料小展示では、当館所蔵史料のうち絵画や写真に注目して、そこに「描かれた」「あるいはそこに「撮された」、近代(明治・大正・昭和)のさまざまな「すがた」「かお」「かたち」「ようす」をさぐりだしてみたいと思います。といっても、新しい時代を描こうと、撮そうとか意気込んで記録されたものではないかもしれません。ここに近代らしいと思われる姿が「ひょっこり」記録されていた、それを探りあててみましょう。 ※①山口県・山口病院之園付大神宮・今八幡・八幡神社ノ図(県庁戦前A総務2009)、②八幡神社境内図(古社寺取調書 吉敷郡神社の部・同戦前A社寺124)、③昭和初期、道都村ノ境内(八幡宮)ノ情景(下神社)〔毛利家文庫B666〕、④明治の小郡の風景(「古社寺取調書 吉敷郡神社の部・同戦前A社寺125」)、⑤中興八幡島神社境内付近景取図(「神社一件 同戦前B680」)、⑥明治末期の光景(「防長各郡」文書館図書290)、⑦下関長府赤松寺境内防長孤島院(「河崎家文書1280」)、⑧社殿神社(「周南市徳山」)〔神社以下神社 大正4年〕(県庁戦前A社寺194)、⑨道都村八幡宮に奉納された車輪写真(「県社以下神社」〔昭和3・5年〕同戦前B666)、⑩昭和初期、緑羅木浜の光景(「中山神社絵葉書」〔昭和6年か〕文書館図書726・58)